

伊能忠敬研究

研究

二〇〇三年 第三三号

史料と伊能図



伊能忠敬研究会

表紙図解説 フランスの伊能中図がボロボロに

伊能大図展とあわせて、フランスのイブ・ペイレ氏蔵の伊能中図も各地の伊能ファンに見てもらおうと、展覧会の予定も固まつたので、ヨーロッパ旅行をかねて、五月二一日ペイレ宅を訪問して、一年間の借用をお願いし快諾をいたしました。その際、破損部分の修復費用を見積るため、開封して写真撮影をした。

以前に佐原で展示してから八年間。触っていないトイブさんはいうが、南九州図の破損が進行してボロボロになつてゐるには愕然とした。前回は傷んでいなかつた東北図は一部が欠落しており、横は破れかけていた。満足な六枚も裂け目が出来そうな状態で、縁では小さな裂けが始まつてゐる。

これだけ傷んでは、展示予算の枠内では修復できないな。このままにして置けばペイレ中図は紙屑になつてしまふ。これは弱つたな、と対策で頭が痛かつた。通訳の話では、地図の様子を見て、イブさんの顔色も変わつてゐたとのことだつた。

帰国後、国土地理院の星野院長とも話合つたが、大事な文化財がゴミになるのを放置はできないな。報道機関に協力をお願ひし、広く声をかけてみるか、というようなことしか知恵はなかつた。たまたま、共同通信さんから電話があつたので、話したところ、日仏両国に訴えようと記事になり、東京新聞、京都新聞、神戸新聞などがカラーで取り上げた。六月一二、三日のことである。

京都新聞の記事を見て、早速一六日に京都の某大手印刷会社から補修協力の申し出があつたから機縁である。忠敬人気は健在だ。関連記事47頁に

(題字は伊能忠敬の筆跡)

(渡辺一郎)

最新情報

「才女・エイ」一大崎栄のこと

伊能忠敬と柏木家の人々

三陸海岸黒崎の伊能忠敬測量記念碑

芳名録より

トピックス

今年度第一回例会および総会報告

平成の測量隊員

伊能忠敬に師事せる先覚の士

質素な忠敬 豪華な夕食

ようこそホームページへ

伊能景利コレクション展

表紙図解説・伊能の地図ぼろぼろ

研究ノート

『伊能家文書紹介24』高橋景保と伊能忠敬

忠敬先生と筑前こぼれ話

伊能忠敬と蝦夷地派遣の幕吏たち

伊能忠敬の島原領測量と島原藩の地図作製

地域史料紹介

伊能忠誨日記(二)

岩城島の伊能測量文書(三)

忠敬談話室だより

近況報告・話題・お知らせ

目次 33号

小島 一仁
柏木 隆雄
四

渡部 健三
伊能 陽子
一〇
一六

福田 弘行
永野 達代
二二
二二

村上 光一
菅原 良太
一四
一四

渡辺 一郎
伊能記念館
三五
二七

小島 一仁
柏木 隆雄
四

最新情報 「才女・エイ」

——大崎栄のこと——

小島 一仁

「才女・エイ」というのは、忠敬が、曆学修業のため江戸へ出てからしばらくして、深川黒江町の隠宅で生活を共にした若い女性のことである。この女性については、かの大谷亮吉氏が、一九一七年に出した大著『伊能忠敬』の中で、高橋至時が間重富に書き送った手紙を引用して記している。

高橋至時は、このエイ（栄）という名の女性について、「何様才女と相見候」と記した後、具体的に、素読を好み四書五経の白文を苦も無く読む、算術もでき地図つくりのしこともできる、象限儀の目もりなど見事によむ、今度の絵図（蝦夷地図）でも彼女は一人前のはたらきをしたようである、などと説明している。

しかし、大谷氏が右のように紹介したことのほか、この女性の出自経歴等については、長年の間、全く何もわからないままになっていた。そのため、井上ひさしさんは、小説『四千万歩の男』でエイについて、

「もと新吉原で『学者おいらん』という仇名で売り、それから深川の色街に住みかえたのを、忠敬が落籍^{ひが}させて引きとつて……」と書いているが、それがフィクションであることはいうまでもない。

「才女・エイ」の氏名や経歴は、ようやく一九九五年になつて、片倉比佐子さんによって明らかにされた。だが、それについては、忠敬に関心を持つておられる人たちも、ほとんどご存知ないらしいので、私は、今年（二〇〇三）に入つて、『香取民衆史』（香取歴史教育者協議会機関紙）に「伊能忠敬の家族たち（四）」を書いた中で、片倉さんの研究成果を紹介させていただいた。

片倉比佐子さんは、『天明の江戸うちこわし』（新日本新書・二〇〇一）の著者であり、忠敬と同時代の民衆の動きを広い視野からとらえようとしている。それで、片倉さんは、忠敬研究という道筋からではなく、江戸時代の女性の社会的文化的活動を追求する中で、「才女・エイ」についてあたつたのである。

片倉さんの「江戸の女性文芸家たち」（『江戸期おんな考』第六号）という論文によると、片倉さんは、『諸家人名録』（一八一五・一八年出版の江戸の文芸家の名簿）に、大崎栄という女性の名があるのを発見した。『人名録』にのつている女性は少数であり、またその活動分野は、ほとんど

が「画」や「書」であつたが、大崎栄は「学者」であり、雅号を小窓、字を文姫といつた。さらに片倉さんは、史料を明示して、次のようなことを明らかにした。

大崎栄は、書をよくし詩文にすぐれていたが、はじめは、下総国香取郡津宮村（佐原市津宮）の久保木清淵に学んだ。その後、江戸で伊能忠敬と共にくらしたが、数年して忠敬のもとを去り、三〇才をすぎてから漢学者山本北山の門人となり、その十才子の一人に数えられた。そして、一八一八年（文政元年）「貧窮のうちに病死した」というのである。

私は『香取民衆史9』では、片倉さんの研究をもう少しくわしく紹介したが、その後に、「エイの出身地は、はつきりしないが、はじめに久保木清淵に学んだ」ということから津宮村（現在佐原市津宮）か、その近辺ではないかと思われる。大崎という姓は、津宮に隣接する佐原市篠原地区（江戸時代篠原村）や仁井宿地区（江戸時代佐原村仁井宿）に数多く見られるので、あるいは、そのあたりかとも考えられる。」と書いた。

その後しばらくして、私は、大崎姓のルーツを調査追求されている大崎博さんという方から、佐原市の大崎という家についての問い合わせの手紙をいただき、それがきっかけとなって、大崎栄の出身地について、大へん耳よりな情報を知ることができた。

私は、大崎姓の家については、佐原付近のことしか視野に入れていたのに、大崎さんは、手紙で、次のように教えてくれた。

「霞ヶ浦周辺は大崎姓がとても多いところです。最も多いのは、行方郡牛堀町（現在の潮来市）の五二軒です。次に鹿嶋市の三九軒、佐原市の三四軒、稲敷郡阿見町の二七軒で、むしろ茨城側に多いようです。しかし距離は近いところです。これらを考えると、彼女の出生地は茨城側とも考えられます。」

そして、さらに、次の手紙では、大崎栄は、現在の潮来市牛堀の清水地区（江戸時代の清水村）で「大山守や庄屋を務めていた旧家大崎家」の出身だったのではないかと知らせてくれた。この旧家の当主（現在市原市在住）は、「昔、うちから佐原の伊能忠敬の家へ嫁入りした人がいる」と言い、また、同氏は、「十一、十二歳のころ、父に連れられて伊能家を訪問したときのことを知っているが、そのときの大人同志の会話では、両家は親戚同志のようであった」とも語ったという。なお、同氏の母堂は「銚子の松本家から來た人で、その母は佐原の伊能家から松本家へ嫁入りした人である」とのことである。

右のことから考えると、「才女・エイ」大崎栄が、潮来市牛堀の旧家の出身であったということの公算は、極めて大きいといつてよいかと思う。

右の原稿を編集部宛に発送してから間もなく、伊能陽子さんからお便りをいただいた。実は、私は、牛堀の旧家大崎家と佐原の伊能家の関係などについて、伊能さんが何かご存知ではないかと思い、お尋ねの手紙を差上げておいた

のだが、それについて、伊能さんは、わざわざ、潮来市の窪谷悌一郎さんに問い合わせ、その結果についてお知らせ下さったのである。

窪谷さんからのご返事によると、牛堀の旧家大崎家は、

「祖先は代々大崎次郎兵衛を襲名し、何代目かは判明しませんが、享保五年（一七三四）文政九年（一八二六）の九二年もの長い間、父子孫三代に亘り水戸藩南部潮来領一六ヶ村、石高一一七四六石を支配する『大山守』を勤役した家柄」

「水戸藩役人の一種、水戸藩北部では『山横目』と云つた。郡奉行の指揮下にて政務を担当。主たる職務は、①御立山（藩有林）の管理、②藩からの布達命令等を各村に下達、③年貢の割付け、④村々の訴訟の調停、などがあり、極めて多忙な職務であつた。」

さらに、窪谷さんは、この大崎次郎兵衛家と久保木清淵とのかかわりについて「文政二年（一八一九）水戸藩による『延方郷校』大聖堂建立の際の棟札に藩関係者と一緒に『郷校講師・下総国津ノ宮村久保木太郎左衛門清淵』の名があり、それらと並んで地元関係者の中に、世話人の一人として『清水村 大崎次郎兵衛』との名も書かれています。これにより、清淵先生と次郎兵衛との接点はあつたことは判明いたします。」と指摘されている。

清水村（現在の潮来市牛堀清水地区）の大崎次郎兵衛家は、その地域きっての名門・資産家であり、久保木清淵と交流があったことはまちがいなかろう。このような家に生まれた娘の中に、久保木清淵に学ぶようになった者がいたとしても、決して不思議ではない。

なお、この大崎家の現御当主（市原市在住）のお姫さんと齋名さんは、高校時代三年間を通して同じクラス」であったので、電話して聞いたところ、はつきりしたことはわからないが、「佐原の伊能という家に行って泊つたことはある」とのことだったそうである。

(六月四日追記)



伊能忠敬と柏木の人々

柏木 隆雄

伊能家の番頭であった柏木の宗家久兵衛並びに幸七から旅先の忠敬へ、伊能家の家計に関する事、役所からの下命事項とその対処、佐原村の市井の出来事などの報告がなされ、忠敬からは応答と指示などが佐原表へ伝達されたと思われる。

江戸東京博物館「伊能忠敬展」の展示物の中に、忠敬の「測量日記」

があつた。ガラス越しに見たその日記の見開きの部分は、寛政十二年（一八〇〇）閏四月十九日、歴史的な全国測量の第一歩の旅立ちの日なもので、江戸千住の宿での送別の様子が記されていた。見送り人の中には、忠敬の嗣子、伊能三郎右衛門（景敬）をはじめ、佐原からの関係者が数名含まれており、祖先の柏木幸七と伴の時右衛門の名も記されていた。測量日記のこの部分は重要な意味を持つが、柏木家にとつても、当時の伊能家との関係を知る上で、大切な資料である。

忠敬は、かねてより念願の蝦夷地測量の許可が幕府から下りて、こ
の一大事業の重要性とこれから長い旅路に想いを馳せながらも、長
男の景敬に移譲した佐原の身代のことも心配であつた。後顧の憂いを
残さぬよう、旅立ちに当たり、佐原から番頭の柏木幸七を呼び寄せ、細
事に亘る注意を与え、後事を託したのであろう。幸七は忠敬よりも年
長で、その時六四才、老齢の身であったが、伴の時右衛門を伴いあ
て見送りに出た。この出立時の礼状を、忠敬は五月二三日付で箱館か
ら佐原の伊能景敬に宛て記している。

閑場幸七、時右衛門、柏屋幸右衛門、歩行も
不自由なるに態々出府、是又、宣頼入申候。

幸七翁は忠敬店の目と鼻の先に居を構え伊能家に出入りした。別称
の閑場幸七は、佐原の町を一分している小野川から田畠に水を引く「佐
原用水」の堰の脇に家があつたことから、このように忠敬や景敬から
呼ばれていたのであろう。

柏木幸七は千住での見送りの日から三年後の享和三年に死去する。
幸七には三人の子がいた。乙右衛門、時右衛門と一女の妙諦（ミヨウ
ティ）である。妙諦は、忠敬の先妻「達（ミチ）」の死後、忠敬の内妻
となる。幸七は忠敬にとつて舅でもあつた。

寶政十二庚申年正月
歲

四月十九日朝五更到深川出三上下六人伊能助船中倉倉年二十
平山主事伊能秀彦为人儀系左耳郭左目長脚弓足朝衣
小雨至辰上深川八幡宮主酒吏主西小道日治作司天利三
寄

伊能忠敬測量日記(蝦夷地測量) 寛政十二年閏四月十九日

わが柏木家の始祖となる柏木幸七は、宗家の柏木久兵衛の子で、分家して乙右衛門を名乗り一家を構えたとなつてはいたが（佐久間達夫氏調査による柏木家系図、過去帳、墓石等からの研究による）最近になつて新事実が浮び上がつた。平成十四年十二月に行つた佐倉の国立歴史民俗博物館での、柏木家寄託文書の調査で、柏木家の「先祖書」から幸七は、伊能家七代目昌雄（忠敬は十代目）の三男で、柏木家に養子入り、所司を傳えた。その後、伊能家に

そうであるならば、忠敬二番目の妻の妙諦は、番頭の娘というだけではなく、先妻「達（ミチ）」と同じく伊能家の血脉の者ということになる。

第八次測量の旅先から、忠敬が秀藏に宛てた興味をひく書翰が残つてゐる。

①文化九年一月二日付西宮より
②同九年一月二十六日付小倉より

柏木幸七の娘「妙諦」は、忠敬との間に、三人の子どもを生んだが、寛政二年に、二十七才の若さで死去する。最初の子秀藏（敬慎）は、忠敬の嗣子の景敬に次いで二男とされ、七才で夭折した順治が三男、ただ一人の女、琴（コト）は達との子、稻（イネ）篠（シノ）に続いて三女と記録されたことが、伊能家の「家牒」に残っている。

二男の秀蔵は庶子でありながら実子同様に伊能家で育てられ、幼い頃から忠敬の薰陶を受けた。第一次測量から第六次測量まで、忠敬の身内として、また直伝の測量技術者として忠敬を補助したことは周知の事実。第六次測量の旅先（大阪）で、病気を理由に江戸表へ帰された。しかし、その後も深川黒江町の留守居を預り、下役人や佐原の伊能家との連絡役として忠敬の指示をこなした。また、忠敬の帰府時には、測量図作成の作業にも従事していた。一時、江戸の桜井家の聟となり桜井秀蔵を名乗っていたが、後に離縁し、その後佐原へ戻って、忠敬の父の生家筋の神保氏を名乗って、神保玄次郎（敬慎）といい、忠誨日記にも登場するが、天保九年に五十三才で没した。

③同九年三月五日付鹿児島より

④同十年三月七日付神ノ浦（現長崎県大島村）より
の四通で文中共通したものに深川黒江町の居宅の売却と、買換えの指示がある。

測量図の作成作業などで手狭になつた黒江町の家を売家とし、八丁堀亀嶋周辺に格好の土地または売家があるとの情報も得て、いるので、よくその辺りを調査し報告せよというもので、佐原表と、直接に測量図作成の作業に従事している間宮林蔵、高橋景保の両氏にも相談しない、と書き添えている。この件は、その後落着。三番目の妻の「信（ノブ）」の舅の桑原隆朝宅であつた亀嶋町に御用所を移した。

これらの書翰においても、忠敬の金銭感覚が顕を出し、「売家の修理にあまりお金をかけるな」「深川宅を売り払い、相応の売家これ無く急に普請に取掛かれば大物入りに相成る」などの注意を具体的な金額を入れて記述しているのである。

三男の順治は七才で夭折したが、三女の琴は伊能家で育てられた後、常陸国龍ヶ崎（現、龍ヶ崎市）の代々の名主を勤める松田家に嫁ぎ、元治元年に七七才の高齢で地元に没した。松田琴として、伊能家、柏木家との交誼は長くつづいた。

初代柏木幸七亡きあと、嫡男の乙右衛門とその伴の音右衛門が、たびたび江戸亀嶋町宅を訪れ、最晩年の忠敬に尽している。特に音右衛門は、文政元年に忠敬が死去したあとも、孫の忠誨、忠敬の長女の妙薰（稻）の手足となり頻繁に江戸と佐原を往来し、葬儀、墓参、祝言、帶解、年末年始の挨拶などの諸事に關つた。

時には、柏木久兵衛（四代目）がこれに加わり、若かつた忠誨の補佐後見を勤めた。忠誨日記には、二人の登場する記述がかなり多く見

られる。

柏木家の墓は伊能家累代の墓と同じ、佐原市牧野の真言宗豊山派の観福寺に在る。墓も隣組、伊能家累代の墓地、墓石に統いて一番上手の柏木家の墓地内に、妙諦信女は眠つてゐる。忠敬とは未入籍であつたため、父幸七の配慮であつたのか、今は知る由もない。秀藏の墓は、同じ観福寺の伊能三郎右衛門（忠敬）家の塋域を一段登つた所にあり、三男の順治は、伊能三郎右衛門代々の墓地に埋葬されている。三女、琴の墓は当初、龍ヶ崎市の曹洞宗大統寺に在つたが、松田家の墓地がその後、東京都江東区の浄土宗摶心院に移されたのでそこで一括供養されていると思われる。

柏木家の宗家の久兵衛は、累代久兵衛の名跡を継ぎ、現在の当主、柏木俊一に至つてゐる。

久兵衛の宗家から分家した柏木乙右衛門幸七家は、息子の乙衛門が二代目を継ぎ、その後、音右衛門、音五郎と血脉を重ねて、現代の当主は、六代政雄の長男、柏木幹雄となつてゐる。小生は、幹雄の弟である。忠敬研究家の佐久間達夫氏は、近著において、伊能家と柏木家の関りについて「測量日記」「江戸日記」「忠誨日記」それに「忠敬、忠誨書翰」からかなりの量の記述を抜粋して下さつた。その一部始終をここに記すことは省略するが、この稿の記述には佐久間達夫氏が調査された資料並びにご著書を参考にさせていただいた。筆を措くに当り、佐久間氏に深甚の敬意と感謝を申し上げる。

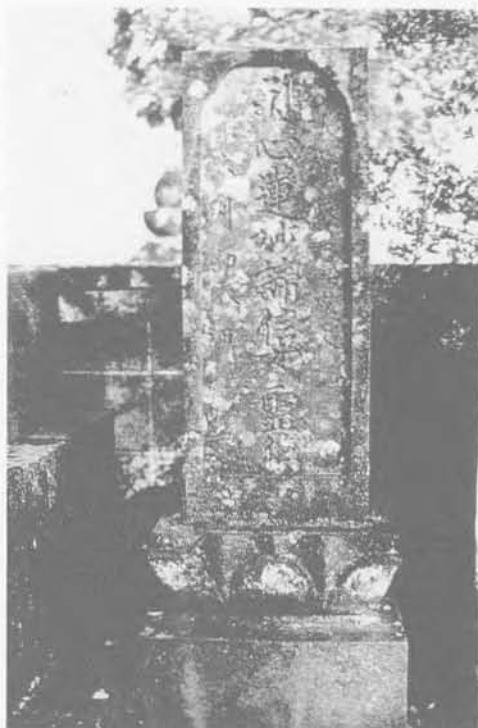
先祖、初代柏木幸七が生れたのは一七三七年、その二〇〇年後の一九三七年に小生はこの世に生まれ出た。何かの縁である。
(かしわぎ たかお・柏木幸七子孫)

六月十五日、東京深川「富岡八幡宮」にて伊能忠敬研究会の測量出立記念式典、総会、講演会、懇親会が開催された。梅雨の真っ最中で前夜はよく降ったが、当日は曇空。雨がなくて助かる。八幡さまは縁日にあたり、境内一円に出店が出現。大勢の人たちが集まる。

今年度第一回例会および総会報告



忠敬の内妻 心蓮妙諦信女の墓・佐原市観福寺 柏木家墓地内



清水靖夫さんの講演「伊能図は近代地図制作にどう反映されたか」



浅井京子さんの講演「伊能図の色彩はどのようにつけられたか」

□伊能測量出立二百三年記念祭

午後一時から本殿に集まる。御祓い、祝詞奏上、玉串奉奠など儀式が行われ、出立二〇三年を祝う。お清めにご酒を頂戴。参列の諸会員と記念祭を通じて、二百年の歳月を深く感じている。参加者の記念撮影は銅像前の予定だったが縁日の人出で本殿前に変更になる。

□総会

一号議案 二〇〇二年度経過報告

二号議案 二〇〇三年度活動方針案

三号議案 二〇〇二年度收支報告

新役員
役員改選

事務局長兼務

幹事会	幹事会	幹事会	幹事会	監理	理	理	理	理	理	理	理	理
伊藤栄子	前田幸子	原田照男	石川清一	小林靖一	清水隆雄	柏木香取	福田祐良	佐久間達夫	渡辺正道	伊能洋	齋藤仁	一郎
編集委員	新潟支部長	九州支部長	関西支部長	新潟支部長	九州支部長	編集長	佐原支部長	総務担当	ホームページ担当	調査担当	調査担当	
ホームページ担当												

幹事 坂本 雄

編集委員

ホームページ担当

顧問 小島 一仁
顧問 伊能 陽子
顧問 安藤由紀子

砂濱は黄色で測線は赤色である。原料は、緑色は藍と簾黃（とうおう）の混色、青色は藍、褐色は代赭（たいしゃ）、黄色は簾黃、赤色は朱砂（辰砂）との説明。日本画の顔料などそのセンスに感心する次第。

質疑応答が活発に行われたが時間になる。

当日の出席会員は代理出席を含めて五二名、議長あて委任状六十九名にて、会則定数をクリア。議長に大友正道さんが選ばれ、各議案について渡辺代表理事の議案説明があり、全会一致で承認された。当日出席の役員が紹介され、総会は終了した。

□例会

昨年に引き続き例会の講演会では一般参加者にも聴講の窓口を開き、公開講座とした。昨年ほど告知に余裕日時を設けなかつたため、参加者は十名たらずと昨年の八十名からすると物足りない結果になつたが、講演後の質疑応答では積極的に質問があり、視点を変えた関心度を感じさせた。

最初の講演は清水靖夫さんの「伊能図は近代地図制作にどう反映されたか」。自身が所有の官板実測日本地図など実物の地図を開陳し、伊能図を基に内務省地理局制作図や海上保安庁水路部の所蔵図の制作経緯を多方面から検証する。近代日本の曙を地図で表現していた。

ついで、現在アメリカ大図の着色制作にあたられている浅井京子さんには「伊能図の色彩はどのようにつけられたか」の講演。伊能図はその色彩がみごとでその芸術性が高く評価されているところ。これまでも伊能図については会報二二号で紹介しておられるが、今回は次の諸点に触れられた。山岳草木は緑色、海山は青色、田地震は褐色、

□懇親会

階下の会場には一膳の食事が見える。本号23頁をご覧下さい。二百年前の忠敬さんが食したお膳である。たいへんおいしく戴く。朝日新聞川の手支局の記者が取材に来る。翌日の都内各版には記事がきちんと掲載されていた。

久々のみなさんとの再会に話がはずむ。齋藤さんの司会でそれぞれ

に思い思いのご挨拶が聞ける。お腹のほうにもたくさん入つてくる。

伊能測量の歌が聞こえ、続編のお話も。程々でお聞きに。ご参加ありがとうございました皆様に厚く御礼申し上げます。

（福田弘行）

北九州の穂吉さん(右)

苦小牧の堀江さん

三条の山浦さん(左)



三陸海岸黒崎の伊能忠敬測量記念碑

渡部 健三

宮城県牡鹿半島南端から青森県八戸市鮫崎までの三陸海岸は、岩手県宮古市を境にして南はリアス式海岸が発達しているのに対し、北は隆起海岸で、その北部は一〇〇メートル前後の台地が崖をなして海に落ち込み、ほとんどの川は西から東へ海岸線に直角に流れ、山と台地に深い谷を刻んでいます。海岸線をたどる道はなく、第二次伊能測量隊は坂越え谷越えの、自然に逆らえない道筋を歩くしかなかつたものと想像されます。

この北部三陸、岩手県下閉伊郡普代村黒崎の断崖上、北緯四〇度線よりわずかばかり北寄りに黒崎灯台があり、灯台の近くの台地に「北緯40度シンボル塔」が設置されているのが目を引きます。これは、その前に立つとセンサーが働いて地球儀が回転するという趣向で、観光客の写真撮影に恰好な題材になっていますが、これと並んで「伊能忠敬測量記念碑」が建つてゐるのを人びとは見逃しません。

碑は太平洋に面し、黒御影石に楷書体で彫られていて、誰にも読みやすく、ドライブで訪れた若者たちも声をだして碑文を読んでいる光景をみると、こちらから声をかけてやりたくなるのです。

十月五日、この地点を通過した伊能隊は、一八〇メートルの高さから一気に海岸線まで下り、黒崎村の金右衛門方に到着し、落ち着く間もなく夜間の天体観測の準備に取りかかつたのでしよう。

園地となつた台地上には国民宿舎と大駐車場があり、往時を偲ばせるものは人を寄せつけない断崖と松林ぐらいのものです。



1:25,000(2倍に拡大) 40度以北は「普代」、以南は「田野畠」(いずれも平成13年修正測)



北緯40度シンボル塔付近から記念碑を望む



伊能忠敬測量記念碑全景

【碑文】

伊能忠敬測量記念碑

徳川時代、幕府の測量家・伊能忠敬は享和元年六月十九日（一八〇一年七月二十九日）一行と共に江戸を出発。わが国東海岸の測量を行いながら太平洋岸を北上。同年十月五日（一八〇一年十一月十日）この地黒崎に到着。緯度の計測を行った。

当日の測量日記に

此夜晴天測量

と記録されている。

明治三年（一八七〇年）東京大学の前身である大学南校刊行の伊能忠敬測定「大日本実測録」に
閉伊郡黒崎村四十度三十秒
と記録されている。

平成十一年三月吉日

建立 岩手県下閉伊郡普代村

史料収集 普代村郷土史編纂委員会

普代村長 岩澤義雄書

現地は、三陸鉄道北リアス線で普代駅下車、バス約十五分。

平成の測量隊員

永野 達代

昨夏、山口県の徳山工業高等専門学校土木建築工学科の教官をしておられる桑嶋啓治さんとおっしゃる方からメールが入った。

徳山高専では測量実習に力をいれしており、数年前からその最初のテーマとして歩測を取り組んでおり、三泊四日の測量合宿のおり、私のホームページに載せてある図をプリントアウトして授業につかいたいがよろしいか、と云う内容であった。

会報に何回か載った歩測に関する記事はお役にたつかもしれないと思いつ渡辺さんに相談すると「ホーツ 歩測を授業に取り入れている学校があるのかい」と感心され、会報のコピーと手許の資料を何点かお送りした。タイミングがよかつたようで、イベントにも活用していただいたのが会報30号9頁の記事である。

測量合宿は雨にたたれたりして歩測をする時間が無くなってしまい、新たに四月に実習がおこなわれたそうである。

お許しを得て桑嶋さんの文章



を使って歩測実習の様子をお伝えしたい。

「授業の最初ではパネルを使って伊能忠敬についての人物や測量方法、業績について話しています。伊能忠敬の残した業績の素晴らしさ、その中で特に五六才から取り組んだこと、生涯学習の先駆的人物であることに熱弁をふるっています」 写真上

「学生達は、下を向きながら自分の歩幅と歩数を確認しながら歩いており、真剣に取り組んでいる様子がわかります。 写真左

歩くだけの作業ではあります

が普段自分の歩幅を確認すること

はあまりな

く、新鮮な

気持ちで実

習に取り組

んでいまし

た」

歩幅(全体)	50~60cm	60~70cm	70~80cm	80~90cm	90cm 以上	平均(cm)
2(人)	11	18	8	1	74.1	

歩幅(男子 28 人)	50~60cm	60~70cm	70~80cm	80~90cm	90cm 以上	平均(cm)
1(人)	6	14	6	1	75.7	

歩幅(女子 12 人)	50~60cm	60~70cm	70~80cm	80~90cm	90cm 以上	平均(cm)
1(人)	5	4	2	0	70.4	

「実習を行つた学生は、高校二年生四〇人です。男女の数は、

男子二八人、女子十二人です」

「30～40歩の距離を測り測定精度は約1%でした。ある程度の測量結果を、歩測によって測定できることを学生達は体験することが出来ました」 写真左

800歩の距離を同じ歩幅で歩くことができるか比較しました。やはり距離が長くなると一步の歩幅も小さくなりましたが、その差は1歩以内であり、短い距離でもある程度の歩幅が計測できることが分かりました。

しかしながら、さらに長い距離を歩測で求めようと思えば、疲労も計算に入れる必要があると思われます。」



歩幅(全体・800m)

50～60cm	60～70cm	70～80cm	80～90cm	90cm 以上	平均	男子平均	女子平均
2	6	27	4	1	73.7	75.0	70.6

誤差

20cm 以内	20～40cm	40～60cm	60～80cm	80cm 以上
18(人)	7	8	6	1

「この実習を行った学生の感想を紹介します。」

・歩測はあまり精度がないと思つたけれど、ある程度は精度があるのに驚いた。

・自分の歩幅の短さに驚いた。

・歩測と聞いたときには、簡単なイメージがあつたけど、実際やつてみると、なかなかうまく結果が出なくて大変でした。

・昔の人々のたくさんの知恵と苦労があるからこそ、現代社会の基盤があるのだと実感し、なおかつ、伊能忠敬は正確な地図を成し遂げたただただ偉大な人物だと痛感しました。素晴らしい。

・実際にやってみると思つていたより誤差が少なくて驚いた。
などの感想が寄せられました。」

「最近の測量技術は進歩しており、かなり高い精度で簡単に計測することが可能になりました。しかしながら、機械の出した数字の距離を信じすぎることは怖いことであり、技術者の感として、また、歩測によって距離を確認することも必要であり、文明の利器に頼り切ることの無いようにしたいとも考えております。これからも測量の第一歩として歩測に取り組んでいきたいと考えております。」

測量合宿のもようは一ちらです。青春真っ盛りの元気な声が聞こえてきそうです。

伊能忠敬に師事せる先覚の士

今般、岩手県東磐井郡千厩町の村上光一氏及び菅原良太氏より忠敬に関する新聞の史料を頂戴しました。その記事とお二人からのメッセージです。記事は一部書き直し読みやすくしました。

小野寺春海の逸話

弁天山紅葉山今昔

昭和一二年一月二日・岩手日報より

東磐地方の紅葉も愈々全盛となり貌鼻渓の如きは毎日観光客で賑っているが、交通不便に辺鄙な為め未だ世間に知れずあたら埋れている陰れたる紅葉山が此の程郡農会技師星義一氏によつて発見され、同時に此の紅葉山に絡る当時のかくれたる先覚の学徒のあつた事が判つた。

即ち東磐井郡大津保村津谷川小松屋雜貨商小野寺権亮氏宅向ふにあらざるこゝりした富士型の山の裾を両方から抱く様に小山があり、これが全山真紅の紅葉で目が醒める様である。称して弁天山紅葉山といつてゐるが、小野寺権亮氏の四代前の先祖小野寺面之助春海と称する士は算法の極達者で、駄賃取りを営み帰路は馬上で読書するといつた勉学好学の士であつた。十七歳の頃伊能忠敬先生が東北測量に出張されたと聞き就いて学ぼうと志し、弘前まで追かけて入門を乞うたが、接近を許されず、明春千葉の自宅まで改めて訪ねて来る様にと断られ、金五両を旅費として与へられて帰宅した。約束にたがわず翌春伊能先生宅を訪問師事し、関西九州方面まで測量に従事した。測量終るや江戸にとどまり、算法の限りを極めたので、今度は医学を志し、医師と

なつた。その時は二十二歳といふ秀才であつた。

その長男は小野寺隆太郎氏で隆太郎氏の妹きのぢ（喜野路）さんは分家となり現在の小野寺権亮氏はきのぢさんの曾孫に当つてゐる。隆太郎氏は花卉盆栽を嗜み、伊能忠敬先生との関係から福澤諭吉先生の知遇を受け、息子の安吉氏を伴ひ人力車で上京した。同氏は生糸商を営み横浜東京間を往来していたが、子供が休暇で帰郷する時は人力車に安吉氏と共に全財産を積んで帰へつたといふ。

古着類を沢山買込み、途中宿場々々で市場を開いて旅銀を得て来るといふ商法家であつた。東磐に人力車が入つたのは津谷川が最初で、明治十五、六年頃といはれてゐる。小野寺安吉氏一家は現在仙台市に在り、旧家はそのまま津谷川に残つてゐる。

村上光一氏のお便り

実は九八年五月に両国の江戸東京博物館の伊能忠敬展に足を運びその遺業に深く感銘をうけて古地図に关心をもつておりました。その目的は長久保赤水の日本輿地路程全図を実見することにありました。というのも本町の肝煎亀卦川家に約三畳分もある大日本図が所蔵され、これは近在の菅原新兵衛満信（一七七三～一八四四）が臨模したものであるとわかつてゐます。もし赤水の日本図をご研究している方があれば、さらに資料の提供をいたします。

ところが今度は近代史に詳しい同好の菅原良太氏より、この伊能忠敬に関する新聞記事発見のことを聞かされ、コピーを貴会に郵送した次第です。

編集部注：この新聞記事の真偽は不明ですが、初めての話題なので紹介いたしました。また、二百年前の「東山郡村繪図」も送つて頂きました。

氣志如
神
昭和三年
夏八月
永興謹書

氣志志也

昭和三年

夏八月

永興謹書

(氣志：氣性と志。この四字熟語は、中国の禮に「孔子聞居」氣志如神とある)

(季は年の古字)

昭和三年

夏八月

永興謹書

夏八月
永興謹書

氣志志也

昭和三年

夏八月

永興謹書

(ナガクチカツテワスレズ)
大正庚申四月二十七日

(大正九年)

拝伊能先生遺文及機
因且親遺訓致不忘
之意

佐藤鏡太郎 花押

永矢不

大正庚申四月二十七日
佐藤鏡太郎 花押

拝伊能先生遺文及機
因且親遺訓致不忘
之意

佐藤鏡太郎 花押

伊能先生の
書道にて

小夜子(?)

大地図の

前にかほれる

牡丹哉

伊能先生の
書道にて

大地図の

前にかほれる

牡丹哉

【詩・衛風・孝榮】永矢弗レ謾(いつまでも誓つて忘れない)

矢 || 誓う

弗 || 不

謾 || 爰

諸橋大漢和辞典より

「小夜子（？）」「永興」さんについては不明ですが、Cの「佐藤」さんについて、白根さんのレポートをご紹介します。

○佐藤鍼（鐵）太郎海軍中将 （出羽鶴岡出身・慶應二年生）

帝国海軍提督總覽（秋田書店刊）によれば「海主陸従を理論づける」とある。

山本権兵衛が日清開戦の直前、参謀次長川上操六を前に、陸軍が陸主海従というなら朝鮮へ大きな橋を架けたらどうだと頑張った。同じ思想である。海軍兵学校同期（十四期、明二〇卒）には鈴木貫太郎、小笠原長生がいる。

山本海相の命を受け、明治三二年英米に戦術勉学に出掛け、米のマハン大佐の著述を愛読し「帝国国防史論」を大臣に提出した。日露戦争時は第二艦隊の先任参謀として活躍、日本海海戦の勝者となつたが戦後それを自慢することなく謙虚な態度を通した。

この署名が書かれた大正九年四月は、海軍大学校長、八月には舞鶴鎮守府長官になった。十二年三月には予備役となり、昭和十七年三月に没した。七十七歳。

余談

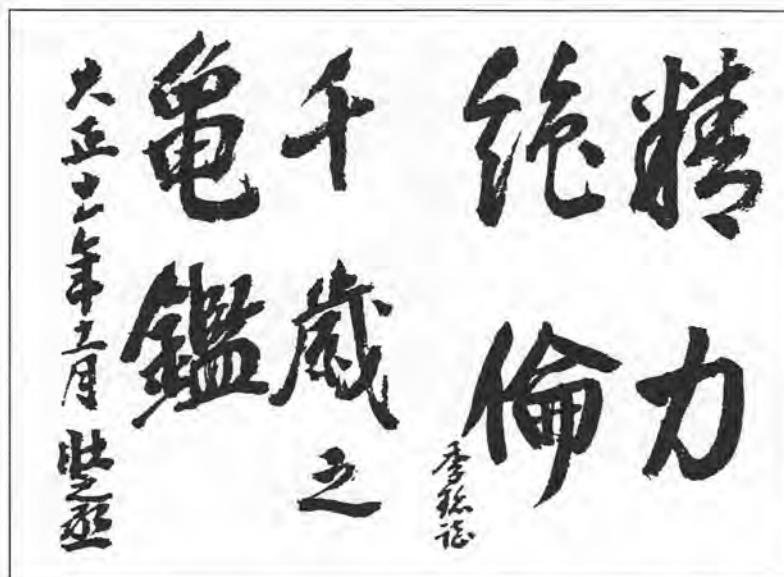
日本海海戦時、第二艦隊の旗艦は「出雲」

艦長 大佐 伊地知季珍（伊能洋さんの祖父）
第二艦隊長官 中将 上村彦之丞

参謀長 大佐 藤井校一
参謀 中佐 佐藤鐵太郎

奇しくも佐藤鍼太郎中佐と伊地知大佐とが同一艦で起居を共にしたことである。

（白根貞夫）



※白根さんがご紹介くださった伊地知季珍（いぢち すえたか）は、洋の母方の祖父である。海軍中将吳鎮守府長官にて退官、昭和十年に亡くなつたので、一才の洋は全く記憶にないと言う。

芳名録には海軍関係の方の署名が多く、それは祖父の関わりによるものと思い込んでいたが、父母が結婚したのが大正十年であるから、それ以前に佐藤さんは佐原にお出でになつたことになる。

そして大正十一年、祖父が旧宅を訪れたときは父の勤務先の大連で姉（井上靖子）が誕生したところであった。
同行の日高壮之丞さんと並んでの揮毫である。

（伊能陽子）



佐藤鉄太郎



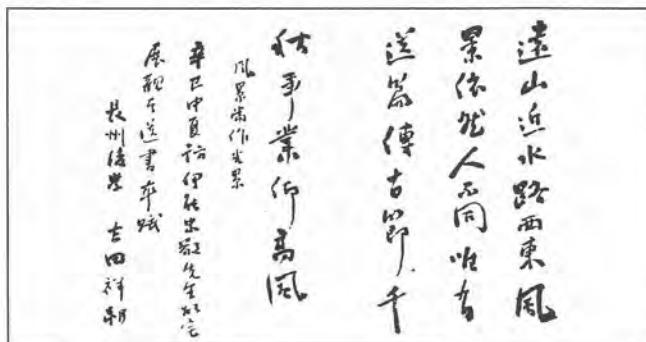
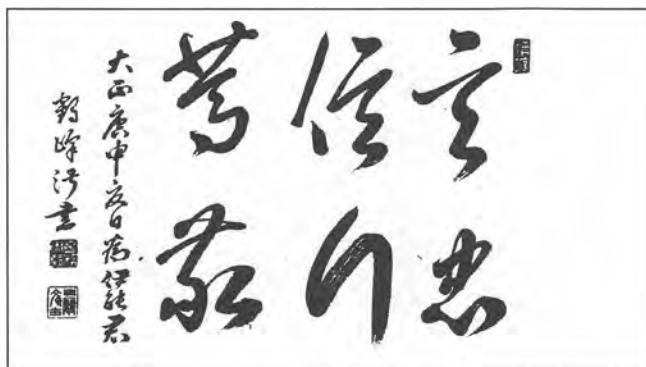
伊地知季珍

前号と同様「芳名録」の解説にご教示をお願いいたしました。思い出などあれば併せてお知らせ下さい。今回はD・Eの二点です。

芳名録解説のお願い・パート2

芳名録 D

芳名録 E



高橋景保と伊能忠敬

安藤由紀子

影の功労者・高橋景保

景保の功績が如何に大きなものであったかは、前の号で具体的に見てきたとおりであるが、ここでもう一度補足しておきたい。

伊能の測量は享和三年までのもの（文化元年上皇の將軍上覽の地図にまとめられたもの）と、文化二年以後のそれとでは性格がはつきり違う。前者は幕府後援のもとで行われたものであり、後者は幕府の仕事として行われたものである。

そして後者の方は、全測量日数の七七・一パーセント、測線距離の七七・八パーセントにあたるので、測量の完成には、後者の方が遙かに重大な地位を占めるものであった。諸侯の援助もしだいに大掛かりなものになり、諸侯との協力事業といつてもよいくらいになつた。残念ながら「景保日記」は文化一・三年のものしか伝わっていないので、それ以後は推測になつてしまふのだが、景保の気苦労の範囲は対幕府はもとより、対諸侯にまで広がつたであろう。

また明治になつて伊能図が、日本に大いに役立つようになつたのは、内陸部分の測量が大変進んで、資料が増加したことによる。この方針の転換は、九州第一次測量のころからはつきりするのであるが、だれがこれを推進したのであろうか。忠敬自身が勝手にこのような追加を行ふとは考えにくい。幕府の事業であったから、彼の一存で変えられ

るものではない。幕府の官僚機構の高官たち、老中・若年寄・勘定奉行等の納得・同意なくして、行われたはずがない。費用の点でも莫大な出費になるから、幕府のほうから方針の変更を命じたとも考えられない。誰かがこの変更を強力に主張し、高官たちを説得したのであって、この人は景保以外には見当たらない。

もともと前号で見てきた通り、景保に対する高官たちの信頼は厚く、彼の外交的手腕も相当のもので、要求が満たされぬ事はほとんどなかつた。

景保は新しい書物にも接し、広い視野からの判断も出来た。シーボルト事件は彼を大罪人に追い込んでしまつたが、広い視野を持つても、足元の現実とのギャップに気付かなかつたからである。

また、彼に厚い信頼をむけた文化期の幕府高官の学術的関心をも功劳者として評価しなければならないだろう。

景保と忠敬の親しさ

景保の公文書の写しは、残念ながら第五次測量のものしかないが、幸運にもそれ以後のものは、測量の現地宛の個人的な書簡が残されている。伊能忠敬記念館の「高橋景保書簡」である。更にこの期間は、忠敬の長女イネが夫の死によつて出家し妙薫と名をえて佐原に戻つており、彼女宛の忠敬書簡も多く残されている。書簡は人の歴史を知る上で第一級の資料であり、この二つの書簡集をつき合わせてみると二人の性格が手にとるようわかる。

景保と忠敬の関係は個人的にきわめて親しいものであり、単に二人が上司と部下であつたならば、景保が江戸でどれだけ細部にわたつて面倒を見ようとも、あれほどの成功が得られたかどうか疑わしい。な

かには十一歳で母を失い二十歳で父を失った景保が、忠敬を父とも祖父とも思い、頼り甘えているような印象を受ける部分さえ見受けられる。忠敬の親しさの中には、やり手で、苦労知らずで、奔放な孫に対する苦々しさも混じっており、その辺の事情を書簡を通じてみていくことにする。

役宅の火災

文化十年二月二十三日、司天台の物置から出火し、役宅が丸焼けになるという事件がおこった。中が炭であつたため焼ける音もせず、屋根に焼けぬける音で気付き皆が駆けつけたところ、最早一面火の海で、離れへ駆け入り父至時の残した書物、測器、地図少々をもちだすのがやつとであった。

焼失、さてさて残念至極の事です。私の書斎には手もつけられず、数年来の苦労は、水の泡になってしましました。不慮の火災とは申しながら上へは申すに及ばず、同役はじめあなた方、間重富ならびに泉下の亡父へ対し面目ない次第となりました。……この上は退役と決心、あとは弟助左衛門へ譲りたき旨、縁者、大槻玄沢へ話し、堀田摂津守へも一通りお耳に入れてくれるよう頼みましたところ、……堀田侯も、玄沢ならびに布施・秋山（奥御右筆）を通じて、退役のことは堅くおさしとめ、是非出勤あるようとのことでした。あなたは測量中、足立左内と馬場佐十郎は松前御用で出張（ゴロウニン事件の処理、人選全般が景保に任されていた）その上満州語も地理もとやりかけの仕事も多く、やむなく出勤となりました。上下・大小・はさみ箱から衣服・下着にいたるまで新調せねばならず、さしあたり不都合だらけです。（後略）

高橋景保書簡 八四一一一 伊能忠敬宛 伊能忠敬記念館蔵

文化十年三月二六日

（前略）それより寝所へ回り外から雨戸を打ち破り、例の大切な蘭書（ランデのこと）持ち出そうとしましたが、一面火の海で取り出すことが出来ず、残念至極空しく手を握り歯噛みをするばかり、しばらくは火中にて火とたたかいましたが、頭髪へ火がついて耐え難く……火急のことゆえ誰も参らず、私一人で奥の寝所へ行きましたところ、

下役の栄六郎来合わせ、二人で蘭書を取り出そうとしましたがこれも出来ず、焼失いたしました。私の心中お察しください。先ずは箸も持たない乞食になりました。……その日宿直は三人でしたが、役所にあつた垂球・御眼鏡・地図・御用書物少々取り出したのみで、多くは

伊能忠敬書簡 七 伊能イネ（妙薰）宛 伊能忠敬記念館蔵

文化十年四月二七日

（前略）浅草高橋御役所ならびにご住居、其の外お預りの書物まで焼

失のよし、手伝いの吉田栄六郎より知らせがありました。（第一報は吉田から入ったので、忠敬はまだ右の景保書簡は見ていない）高橋氏はしばらく「差控え」と思われます。高橋御役所は上の覚えもよく、ここのみ御用仰せ付けられ、他の御役所のねたみもあり、高橋氏の勢い強すぎるよう聞いております。私信を出すことに、恭、謙、譲、と言葉を謹、心を慎、が大切と申し上げてきました。満れば欠けるの通りになつて、大変残念です。

江戸にいれば何かと支えになつて差上げられるのに、こんな遠いところにいたのでは何も出来ません。火事見舞いとして金十両差上げたく思いますが、遠国ではどうにもなりませんから私の月々の御扶持米代金、高橋方へ預けてある分から差し引いて普請の一助にもなさるよう手紙を書きました。（江戸では預かっていた代金は持ち出せず大半は失われてしまつた）…

私は幼年の頃より高名出世をのぞんでいましたが、親の命令で佐原へ養子にいかされ、好きな学問も止め産業を第一に伊能家の先祖の格言を守り、教民も行い、功なり名遂げて江戸へ隠居しました。その上日本国中の測量拝命、各国大名のお世話を受けて今日に到り、まことにあり難く、これも天命と言わんか、先祖の礼徳と言わんか、とても言葉では言い尽くせません。（後略）

天才的な人間にはバランス感覚のないところがあり、忠敬は普段から苦言を呈していらっしゃる。景保の生き方と引き比べて、唐突に、自分の生き方の着実さへ思いをいたしているところ、いかにも忠敬らしく面白い。

長男景敬の死

文化十年忠敬の九州測量中、長男、三郎右衛門景敬が亡くなつた。佐原へは重病とのみ知らせるよう口止めして、景保は次のように書いた。

高橋景保書簡 伊能忠敬宛 八四一一九 伊能忠敬記念館蔵

文化十年八月十七日

（前略）三郎右衛門殿大病の由承りました。痛苦の極みに存じます。お聞きになつて驚かれると思いますが、承つたのにお知らせしないと後悔しますのでお知らせいたします。別封で佐原より詳しくご説明があると思いますので、これで納得してください。…御用向きもあと少しとなりました。お心を強く持つて、お覺悟の上お勤めなさいますよう。右の件お聞きになつて、御病氣にでもお成りやと心配でなりません。生者必滅・老少不定といいますが、お覺悟の上ただただ御老体おいといなされ、すべては浮世とおぼしめし、今わずかの所ご卒業なさるよう祈つております。嗚呼

（後略）

三郎右衛門は、父不在中の伊能家を守り、景保も一方ならぬ物質的援助を受けた身であった。重病の由のみ述べて、死を暗示した苦渋に満ちた文になつてゐる。

景保は女性にとがくの噂のある人物であり、遊里からの感染でもあるか、長く淋病に苦しんでいた。こんなことを相談できるのは忠敬だけだったらしく、何通も言及があり、忠敬も薬の調合などを教えて

忠敬の没後

やつてゐる。このやりとりは、二人の間の関係がいかに親密なものであつたかを示している。それは当時特別恥ずべき事ではなかつたかもしれないが、風邪や腹痛と同様にだれにでも気軽に話せるようなものでなかつたことは明らかである。

高橋景保書簡

伊能忠敬宛 八四一一七

伊能忠敬記念館蔵

文化十年一月晦日

（前略）私は、先月一二三日より淋病発し、日々悪くなつてきました。

二三日よりはことの外の疼痛で昼夜苦痛大きく、蘭法のドリュシスという強い薬をのんでいて、痛みも次第に減つてきました。しかし腹汁は出ています。強い薬のせいいか口の中が腐乱し、正月元日より五日までは絶食同様でおもゆをすするのみ、この薬は止めました。しかし日々寒熱往来、去る廿日よりは痔疾の痛みにて大いに悩みました。：：漸く二八日に頭より上ののみ上げられるようになりました。ご推察ください。

又五か月後の書簡には、次のような追伸が書かれている。

なお淋疾の件、四味解毒のお薬方お教えくださり、有難うございました。：：まだお薬方は用いておりませんが、医師に相談のうえ飲んでみる積りです。

忠敬の処方は若い頃医者を志した頃したものでもあるうか。測量中の忙しい中こんなことまでしなければならないとは、ご苦労さまなことである。この様な書簡がやりとりされること自体、二人の間が特別なものであることを示しているのではなかろうか。

世田谷の伊能家に忠敬のお墓の仕様書一式が残つていて、宛先は「高橋様」となつてゐる。二人の親密な関係は終生変わることなく、お墓の費用はすべて高橋家で持つたらしい。遺言によつて至時先生の隣りにつくられた墓は、「東河伊能先生之墓」と刻まれ、至時の「東岡高橋君墓」よりずっと大きく立派である。世田谷伊能家の史料によれば、十六両三分二朱あまりかかつてゐる。

忠敬と親交のあつた小宮山楓軒によれば、「勘解由死す。高橋作左衛門の墓へ並べて葬る。寺僧いわく、『御目見え以上の人と以下の人と並べて葬るのは如何なものか』」景保はこれに答えて、『勘解由の高名は父に勝る。その上我が家の恩人である。並べて葬つてよい』と言つたといふ。

我が家の恩人云々は、盆暮れの金品から、隅田川のほとりの別荘まで伊能家が世話をしたことなどを指してゐるのだろう。

忠敬の峻厳な人柄からいって、景保に対して批判が無いはずは無いが、景保の方は忠敬を尊敬し、親身の愛情をいだいていたと思われる。天文方筆頭、蕃所和解御用所長官、御書物奉行まで兼務し、学問・外交の分野で最高の地位にあつた景保は、忠敬没後十年の文政十一年十月十日夜、沢山の提灯にお役所を取り囲まれ網をかけた籠に乗せられて引き出された。

それまでの要求はほとんど受け入れられ、数多くの伊能図の写しを各大名のために作つてゐた景保は、忠敬が心配したその性格からいつて、シーボルトに伊能図を与えるのにさして警戒感を持たなかつたと思われる。

取調べ中景保は、伊能図の写しをシーボルトに与えたのは、國の為

にしたことであるという信念で答弁し、卑屈な態度は見せなかつたといわれている。仲間であった近藤重蔵が、以前罪を得て「大藩預け」なつたことから考えて、自分もその程度の罪だらうと思つていたらしが、結果は「存命なれば死罪」であった。森田潤三郎氏は「景保はお預けを予想せし如くなるも、申渡書に『存命なれば死罪』とあれば却つてはやく病死（獄死）せしがよからしやとおもわる」と述べている。

彼が獄中から出したと言われる手紙の写しには最後に「……家内の事何分お心添えよろしく願います。アア婆恋しヤナア 鈴木様（書物奉行の同僚） 入牢人、保」とある由で哀れさを感じさせる。彼の極刑には謎が多く、例えば堀田撰津守・間宮林蔵などはどう動いたのか……これから研究に待つ外はない。

忠敬が生きていれば八四歳になるが、彼の住まいだった地図御用所でカタカナの地名入りの写しを黙つて作らせたかどうか疑問である。獄死した景保は、眼を抜き内臓も取り出して塩を詰め込まれ、たるの中で塩づけにされて処刑の日まで保存されたという。

参考文献

- 「伊能忠敬書状」
「高橋景保書簡」
上原久「高橋景保の研究」

- 千葉県史料 近世篇
伊能忠敬記念館蔵
講談社

長々と書いてまいりましたがこの号を持つて休筆させていただきます。世田谷の伊能家文書の目録を、頭のしつかりしている内に完成させたいというのがその理由です。拙文を読んで下さった皆さまにお礼申上げます。

質素な忠敬 豪華な夕食 総会懇親会場で試食

伊能測量隊が第五次測量で徳山毛利領宇田村（現在の山口県阿武町）に立ち寄つたのは文化三年（一八〇五）六月一日。その時、供された夕食が富岡八幡宮で再現されました。鯛の造りなど豪華な六品が並ぶ。鯛は細作りに、大根、根イモ添え。銀杏と山芋と青昆布のすまし。玉子ふわふわに花カツオ添え、それに根いもとササゲのカツオだし汁に、ご飯とお新香。伊藤栄子さん解説の徳山藩測量御用意記によつたものです。忠敬の個人事業から幕府の事業に変わつたことを反映し、各藩は競つて接待したようです。夜間の天体観測も重要な仕事だったので、酒はご法度でした。



この日、会員のみなさんには山盛りの伊能隊の夕食と筑前煮、寿司、焼き物、山菜と野菜料理などを味わつていただき、最後は、わんこそばに、文化八年三月豊田で出された「お蕎麦」の味を参考にした江戸風味添えでした。八幡宮の料理長さんによれば「真鯛は天然もの、野菜も鮮度のよいもの、玉子もいろいろ試してみた」ようで忠敬さん再現にご苦労されたようです。

（編集部）

忠敬先生と筑前こぼれ話

河島 悅子

福岡藩編纂事業として現在も重用されている地誌に貝原益軒著『筑前国統風土記』、加藤一純著『筑前国統風土記附録』、青柳種信著『筑前国統風土記拾遺』の三大地誌がある。

世に高名な益軒の『統風土記』は、筑前藩正史たる『黒田家譜』上呈の元禄元年（一六八八）に編纂許可をうけ、当時益軒先生五十九才であった。

十六年後の宝永元年（一七〇四）一応完成したが未だ得心ゆかず、最終修正本上呈は、宝永六年（一七〇九）益軒八十才であった。

この間、大和本草・養生訓は世に知られ、吾嬬路（東海道）の記、きそ路（中山道）の記など、十余種の紀行記は平易な文体と現地を辿つての確かな眼で、江戸中期の姿が写し取られ、今もつて読者をとらえて離さない。これらの著書は大体において七十才の退職後に完成している。

彼は在職中損軒と号し、退職後益軒と改めた。正徳四年（一七一四）八五才で没するまで、公私共に旅の多い人であった。

次に『附録』を命じられた加藤一純（愚山）は、大組八百石の大身である。彼は業半ばにして寛政五年（一七九三）没、高弟が後の編纂を継続し、その手伝いとして青柳種信（勝次）がいた。寛政十一年（一七九九）附録の完成と同時に手伝いの任を解かれた。種信は、城代組六石三人扶持の下級武士で柳園と号した。

輕輩ながら江戸藩邸詰めの天明二年（一七八二）十七才より、同六

年（一七八六）までの在府中、井上周徳（南山）に学び寛政元年（一七八九）再度江戸詰めとなり、松坂で本居宣長に接し入門、江戸在府の各藩の門人達と親しく交わり、筑前における国学の始祖ともいわれるが、哀しいかな身分の低さは如何ともなし難く、足軽から辛うじて文化五年（一八〇八）浦方役人に転じたのみであった。

同九年幕府測量方の海辺測量に同行、専ら忠敬師の質問に応じていたが、伝承によると、ある日、種信公用のため測量隊に姿を見せなかつた。忠敬先生「なんだ、青柳は来ないのか」とたちまち不機嫌になり、一日中それは続いたという。毎日付き添つて原佐太夫（二百石）、山本源助（十九石四人扶持）分間方、井手久藏（十五石四人扶持）などがどう取り成しても無駄であった。幕府天文方の御機嫌を損じては大変と、藩重役連は慌てて種信を呼び戻したことだろう。以後測量方が領内測量中彼は随行した。

長州（山口県）へ測量隊が立ち去るや、藩では直ちに「青柳勝次は何者なるか」と調査指示がなされ、以下その報告書である。

御浦役所付、青柳勝次と申す者、年来国学相好み、正得正実の者ニ而有之由ニ付、承合候処、右の者若年の頃より儒学相好み、最前御足軽相勤め、度々旅行致居り候内ニも専ら志宜しく古言の和歌等相募り、万葉集調子委敷、追々国書に志厚く数年国書熟読いたし居候由ニ而、余国より相募候者多、当役は別而繁多ニ相勤候内ニも相たゆまず、筑前風土記之実意極々古代之、分りかたき事も相調べ居ニ付、先年奉幣使（注1）御下向之節も右体の儀ニ而、専ら彼方の役人致取合、其後も対州下向之御役人（注2）内よりも、右之者国学ニ志深キ儀を相用候面々も不少、小身之者ニ而御用繁ニ相勤候内ニ古事専ら相調、儒佛之ニ筋もあなどらず別而質素第一ニいたし國

学之事は他ニも類少く、奇特之者ニ有之候由、右之通、風説承申候

戊正月（文化十一年）九日

以上

取来 切米六石三人扶持 浦方頭取半札

青柳勝次

生得実体ニ有之、年若之比より儒学相好、
勤用繁多之内ニも追々国学をも心懸、古実

等委相調子罷在候付、他邦掛り合等之義ニ
茂御用達候段達 御聴候、依之以格別直札

被仰付、国学家業城代組被仰付候、弥
相勤励可申候事

（注1）仲哀天皇御廟香椎宮は甲子年即六十年に一度朝廷より奉幣使
が差向けられた。文化元年（一八〇四）がそれに当り青柳種信が公卿
一行の案内役を勤め、京都まで彼の評判が取沙汰されたという。

（注2）將軍代替りを祝う朝鮮通信使。慶長十二年（一六〇七）より文
化八年（一八一）まで十二回行なわれたが、文化八年は江戸に行か
ず対馬で祝賀を受けることになり、その準備のため、五年前より幕府
要人が往来したが、青柳種信を指名で案内させる者もあり儒者として
すでに高名であり、他藩より召し抱えの誘いも多かつたが福岡を離れ
ようとはしなかつた。

苦節三十有余年、四十九才にしてやつと陽があつた。忠敬先生が
不機嫌にならなければ、終生藩主の耳には届かなかつたであろう。御
館において毎月講義をする事もなく、加藤一純の『筑前国続風土記
附録』の再吟味を命じられることもなく、『拾遺』『筑前町村書上帳』
の大著も県内怡土郡出土の絵図付考古学資料等々貴重な郷土資料を遺
すことはなかつたと思われる。

実力充分でも運が悪ければ、又、心懸けが良くなれば、世に容れ
られないのはいつの世でも変わらない。彼も天保六年（一八三五）七
十才まで生き、世に出た二十一年間、青柳種信の名を不朽にする量の
仕事をした。

古文書はあまり読めないのだが、青柳種信の文献調べに九州大学研
究室で吉田家傳録を読みふけっていたら、三頁程先で「伊能勘解由」
の字が目にふれた。この中に測量日記にときたま記されている広羽八
左衛門弟八十郎に関する次のような文を目にした。

八十郎は部屋住み身分と思われる。福岡で忠敬先生に入門していた
が、領内だけでは物足りず江戸留学を申し出たらしい。



同歲（文化十一年）五月廿一日、經年（中老吉田經年五千二拾石）
御館ニ於て左之趣、申渡ス

城代組分間方 広羽八十郎

公儀測量方伊能勘解由、去る秋御領内入込候付、其方儀同人江入門
願之通被 仰付、博多旅宿江入門致し新曆術法之儀、咄合付候得共、
御領内滞留わずかの事ニ付、調子筋委細に出来不仕旨ニ付、当夏秋
二かけ出府致候バ、一年中申合せ、世話致す可き旨、噂仕置候、右
ニ付相応の勤方ニ而江戸表江差越され候バ、非番の節一際精を出し
仕たき旨相願候、依之御縁女様（藩主斎清の新夫人、二条左大臣治
孝女）御附小姓被 仰付、江戸表江御下向御供、直ニ江戸詰方被 仰
付候。入念に相勤め非番節天文曆術等一際、修業致しいよいよ丈夫
ニ 御用達いたし候様、出精仕ル可候事

（福岡藩吉田家伝録続巻の十二より）

京都二条家の徳姫附小姓として入輿に付添い、江戸に下向後は詰方
侍として勤め、非番の日は勉学に励み、役に立つ人間になるために精
を出しなさいと、いうところであろうか。

福岡藩分限帳にも、広羽家はあるが八十郎の名は無く、多忙のまま
放置していたところ、二〇〇二年二九号、佐久間達夫氏の「江戸在住
日記（八）」で突然現れた。

「文化十二年一月十六日、福岡藩中広羽八十郎より書状到来、並換金
一両、島ちりめん一反到來」とある。彼は十一年十一月出府している
から、江戸屋敷よりの便りであろう。

（島ちりめん）とは輸入の上絹物

福岡で、すでに入門しているから、一両は丸一年分の月謝だろうか、

文文廣羽は時改候可付

御館ニ於て左之趣、申渡ス

一
同歲五月廿日經年御館於左之
趣申渡

廣羽八十郎





長崎街道を行く

松尾卓次



長崎～小倉、竜馬が駆けた道

伊能忠敬の長崎測量

- 伊能忠敬の長崎測量
- 長崎市の入江正利さんです。伊能隊の長崎測量を測量日記と地図で丁寧に書かれています。現在の地名や登場人物の研究による苦労を感じます。
- 島原街道を行く・島原の歴史
- 島原市の松尾卓次さんです。話題満載です。

筑前藩屋敷は桜田門近く、現在は霞ヶ関の外務省の敷地だから、忠敬先生宅までさほど遠くはないが、休日は月二回しか無かったのだろうか、毎月二回平均で翌十三年まで通っている。彼の家録は分間絵図方で二十二石七人扶持、文化年間のみ二十五石六人扶持になり江戸定府である。

天保で元の二十二石に戻り、分間・天文方兼帶で明治を迎えていた。分間方（測量士）という地味な仕事上、広羽八十郎の功績は判然としないものの、それまで、論所・論川が多かった筑前国境がさしたる紛争も無く、次々と解決していった事実の裏に、幕府天文方伊能忠敬の直弟子という肩書きと、理に叶った測量法が、少なからず役に立ったと考えたい。

身分制度が厳しい幕末、下級武士と部屋住み青年、貧しさと絶望感に耐え己が道を一途に生きる人々に、忠敬先生はさりげなく応援の手を差し伸べてくれたのかも知れない。

（かわしま　えつこ・歴史街道を歩く会代表）

□伊能忠敬・加賀藩測量二百年展

期間 11003年4月16日～11月31日

<http://www.geocities.jp/kukawasaki/>

金沢市の河崎倫代さんです。こんな歓迎のことばです。子供さんたちを対象にわかりやすく説明が続きます。「ようこそ。みなさん『伊能忠敬』を知っていますか？江戸時代の終わりころ、国を測量して日本列島の正しい形をはじめて地図に現した人です」……今年の十一月二十日まで伊能測量のルートに沿って、一日ずつ進んでゆきます。毎日更新はなかなかの労作でしょう。今頃は愛知から岐阜かな。江戸へ戻るまで）支援下さい。加賀藩や西村太冲も登場します。

河崎さんリンクしています。このふくわむらわ。

□伊能忠敬・加賀藩測量二百年展

<http://www.geocities.jp/fb4wing/>

長崎市の入江正利さんです。伊能隊の長崎測量を測量日記と地図で丁寧に書かれています。現在の地名や登場人物の研究による苦労を感じます。

□島原街道を行く・島原の歴史

<http://www.c3station.gr.jp/~takuiji/>

伊能忠敬と蝦夷地派遣の幕吏たち

～蝦夷地測量時における～

堀江 敏夫

はしがき

伊能忠敬の蝦夷地測量には二つの大きな意味があつた。その一つは師高橋至時に指摘された子午線一度の長さ（緯度一度の南北の長さ）を求めるものであり、もう一つは幕府の東蝦夷地の直轄支配に伴う警固のため精密な地図を作ることであつた。

北方問題はロシア人のエトロフ島上陸、異国船の来泊に伴い、幕府は寛政一〇年（一七九八）三月から一月にかけて目付渡辺久藏など一八〇人の大調査団を蝦夷地に派遣した。その結果、翌一年正月外國との国境を取り締まるため、東蝦夷地のうちウラカワからシレトコ岬までと付属諸島を幕府直轄地とした。そして、書院番頭松平信濃守忠明（同一〇年一二月発令）、勘定奉行石川左近将監忠房、目付羽太庄左衛門正養、使番大河内善兵衛政寿、勘定吟味役三橋藤石衛門成方を蝦夷地取締御用掛に任じて五人体制とした。その後、蝦夷地御用の幕吏たちの発令があり、二月以降江戸出立が続いた（新北海道史）。

寛政一一年六月には幕吏の松前領往来が頻繁となり、繁雑な事務と不便さが伴うことから、シリウチ川以東ウラカワまでを追加し知した。この間、蝦夷地への松平信濃守の派遣、大河内善兵衛、三橋藤石衛門の再巡視があり、信濃守の部下で忠敬に沙汰書を渡した吟味方改役並鈴木甚内、御徒目付細見権十郎はともに寛政一一年二月から九月まで

蝦夷地に渡つてゐた。また、七月には天文方渋川主水の手付堀田仁助により海路測定が実施された。

伊能忠敬の蝦夷地測量はこうした北方問題の厳しい時期に、幕府との実施交渉が行われた。蝦夷地取締御用掛の寄合の席に呼び出された忠敬は松平信濃守から堀田の描いた航海図を出され、仁助図との違いを下げ札で示すよう仰せつかり、細見権十郎が側で蝦夷地の様子を詳細に語るのを聞いた。忠敬は蝦夷地について不案内であり、その場に行つて土地形勢などを見なければ何も申し上げられないというだけだった（伊能忠敬測量日誌第一巻）。実際に蝦夷地に渡つて、それなりの知識を持つ人々との蝦夷地測量交渉は想像以上に困難で、厳しいものであつたと推測されるのである。

蝦夷地御用の幕吏たち

幕府は寛政十一年（一七九九）二月松平信濃守を蝦夷地に派遣し、寄合村上三郎右衛門、西丸小姓組遠山金四郎、西丸書院番長坂忠七郎を差添とした。三橋、大河内もそれぞれ再度蝦夷地に向かい、二月には蝦夷地御用の付属幕吏が発令された。御勘定組頭松山惣右衛門、御勘定太田十右衛門、同高橋三平、吟味方改役並鈴木甚内、同水越源兵衛、同大嶋栄次郎、支配勘定佐藤茂兵衛、同近藤重蔵、同松田伊左衛門、同竹尾吉十郎、同菊地惣内、同木原半兵衛、同田邊安蔵、同格富山元十郎、支配勘定勤方松平信濃守與力岩間哲蔵、御徒目付細見権十郎、同村田兵左衛門、同岩瀬猶右衛門、同藤本徳三郎、同湯浅三右衛門、西丸御徒目付堀越友左衛門、同比金市郎右衛門、御徒押より御徒目付勤方宮田次郎橘、表火之番より同比留半蔵、同小幡千次郎、同正田周平、西丸表火之番より同金指専八郎、同岡田大五郎、御小人頭より同和田兵太夫、御普請役元締格寺田忠右衛門、同三浦千蔵、同宮本

源次郎、同山田鯉兵衛、吟味方下役野々山牧三郎、御普請役最上徳内、同中村小市郎、同戸田又太夫、同渡辺大之助、同河野権次郎、同倉橋藤四郎、同安藤三次郎、同庵原久作、同寺澤治郎左衛門、御普請役勤方長嶋新左衛門、同村上次郎右衛門、同佐藤平八、同出役屋代龍八郎、御中間目付深山宇平太、御小人目付大橋善八郎、同青柳貞市、同小林新五郎、西丸御小人目付井上辰之助、同栗山政五郎、同宮川勝助、同内田平四郎、同西村常蔵、御小人より御小人目付勤方梯沼次郎、同相川平作、同根津清左衛門、同柳田元吉、同安藤巳之助、同塚田富次郎、同田口久次郎、同岡田左市、同古澤常吉、同八田直四郎、西丸御小人より同松田仁三郎、御先手同心より同高橋次太夫などであつた。これらの幕吏は宿割り、普請（道路開削・会所建築）、場所請取兼交易掛、各地仕入御用掛、江戸会所掛、エトロフ掛などの受け持ちを決めて、寛政一年二月中旬より二〇日までに江戸を出立したが、一部は直接海路により蝦夷地に渡つた者もいた。（休明光記卷之二）

松平信濃守、三橋藤右衛門、大河内正寿は寛政二年五月初め松前に着き、それぞれ二十数名の部下を引き連れて蝦夷地巡視を実施したが、松平はネムロからシベツに至り、シレトコ岬を望み、シャリ岳の南を経てクスリ（釧路）に出て、箱館に戻り、三橋は病のためウラカワにとどまり、大河内はシャマニ（様似）にあつてシャマニ山道・サルル山道開削の指揮を執つた。この巡視には鈴木甚内、細見権十郎も加わり、松平信濃守と共に九月中旬江戸に戻つてゐた。

なお、この期において特記すべきことは、後に忠敬の蝦夷地測量交渉において、蝦夷地取締御用掛との取り次ぎ役となつた御徒目付細見権十郎の熊退治事件であつた。

寛政二年六月二九日（晦日）、猛熊が食を求めて海浜を徘徊し、アイヌ小屋に入り食物を喰い、人にも襲いかかり、驚いたアイヌは逃げ

去り、翌七月一日このことを勤番所に訴えた。ウラカワに詰合い中の村上三郎右衛門はこの地に在つた細見と御小人目付西村常蔵にこの熊退治を命じた。二人は津軽家勤番足輕二人、アイヌ二人を連れて山中に熊探しに入り、二度ほど見つけて鉄砲を放つたり、アイヌが飛びかかつて倒そうとしたが逃げられてしまった。七日に再び現れ、津軽家足軽に飛び掛り押し倒して逃げるのを、権十郎、常蔵が一手になつて追いかけると、熊が立ち戻り権十郎目掛けて飛びかかってきたので、刀を抜き熊の喉を突き、常蔵に向いかつたので刀で目より口にかけて切り裂き、ふらふらとよろめき歩くところを津軽家足軽がとどめの鉄砲を放つた。この熊は九尺七寸という大熊であつた。この事件はウラカワにとどまつてゐた三橋藤右衛門がこの地を通行した松平信濃守とも相談し、直ちに幕閣に報告することになり、藤右衛門が江戸詰の羽太庄左衛門に書状を送り、さらにこれは蝦夷地担当老中である戸田采女正氏教に渡され、八月八日に次の返書があつた。

御徒目付細見権十郎、御小人目付西村常蔵、蝦夷地にて熊を仕留候趣、其節之始末、三橋藤右衛門より委細申越候紙面一覽之事に候。両人とも如何にも手際能、在勤先之儀勇氣も引立候勤ニ而、不慮ニ骨折候儀と存候段、右一同尊申事ニ候、此趣彼者共へも可
被申聞事。

（「休明光記附録」卷之二）

羽太はこれを受け取り、蝦夷地の御用掛に伝えられ、権十郎、常蔵に達せられた。兩人は帰府の後、権十郎は御勘定に、常蔵は御普請役に昇進したというが（北海道史人名鑑）、「伊能測量日誌第一巻」の寛政二年四月二二日条には御徒目付細見権十郎とある。

蝦夷地在勤（巡視）における各階級の拝領物・手当ては次のとおりであつた。百姓・測量試みの忠敬の一日銀七匁五分の手当てからみると、羨ましいほどの待遇であつた。

・松平信濃守 御暇金一〇枚、時服四・羽織、御朱印 人足八人・
馬五疋、御証文 御用長持一棹、御合力米七〇〇石一二ヶ月割、
御扶持方分限に応じ一倍、宿代一ヶ月銀七枚。

正、御扶持方三人一倍、御手当一日銀一〇匁、宿代一ヶ月金一分、
雜用金一ヶ月二両、賄道具代金二分、筆墨紙蠟燭品物。

〔休明光記〕 卷之二

蝦夷地担当幕吏は松平信濃守など蝦夷地取締御用掛諸侯の推舉により、七十数名が選ばれたが、身体強健、意志堅固であることを必要としたので、人選にはあらかじめ家族、親戚と熟談させ、特に希望する者だけを採用した。その多くは以前に蝦夷地のことに携わった者、もしくはその子孫であった。蝦夷地御用掛の時は、その部下の幕吏はみな現職でその任に当たっていた。(新北海道史)

東蝦夷地の全体上知にともない、寛政一一年一〇月に老中戸田采女

正の決裁をうけ、当冬越年者を決めた。箱館に水越源兵衛・寺田忠右衛門、シャマニに村上三郎右衛門・長坂忠七郎・最上徳内・中村小市郎、アブタに松田仁三郎、ホロベツに長嶋新左衛門、ユウフツに山田鯉兵藏、高橋次太夫、サルに比金市郎右衛門、ヒロウに三浦善藏、クスリに菊池惣内・庵原久作、アツケシに富山元十郎・近藤重藏、ネムロに井上辰三郎などで、また、当冬に一時帰府し、来春折り返し蝦夷地御用となる者は大嶋栄次郎・佐藤茂兵衛・戸田又太夫・田口久次郎・西村常蔵・栗山政五郎などであった。(休明光記附録卷之二)これらの人びとは伊能忠敬測量日誌でもお馴染みの人たちであった。

姫田仁助の奥羽・蝦夷地の海路測量

幕府は東蝦夷地の経営にあたり、会所(漁場など)運営、道路開削、橋新設、渡船場設置、宿駅・休所開設、人馬の配置、繼送業務を確立させ、陸路を整備して人の往来を自由にし、迅速かつ大量の物資を移出入するため、東蝦夷地への直接海路を開くことを急務とした。

・御小人目付・御小人目付勤方 御暇支度金三両、御証文 本馬一疋、御手当一日銀一〇匁、宿代金一ヶ月三分、雜用金一ヶ月五両、筆墨紙蠟燭代一ヶ月金二分。

・御普請役・吟味方下役、出役御普請役勤方 御暇支度金三両、御証文 本馬一疋、御扶持方三人一倍、御手当一日銀一〇匁、宿代一ヶ月金二分、雜用金一ヶ月三両二分、筆墨紙蠟燭代一ヶ月金二分。

・御普請役・吟味方下役、出役御普請役勤方 御暇金一〇枚、時服二・羽織、御朱印 人足八人・馬五疋、御証文 御用長持一棹、御合力米四〇〇石一二ヶ月割、御扶持方分限に応じ一倍、宿代一ヶ月銀五枚、物書料金三〇両。

・御勘定・吟味方改役 御暇金二枚、時服二、御朱印 人足二人・馬三疋、御証文 御用長持一棹、御合力米二百俵・四物成一二ヶ月、御扶持方分限に応じ一倍、御手当金一日一分二朱、宿代一ヶ月銀一枚、書物料金一五両、賄道具代銀四枚、筆墨紙蠟燭品物。

・吟味方改並・支配勘定 御暇金二〇両、御朱印 人足一人・馬三疋、御証文 御用長持一棹、御扶持方分限に応じ一倍、御手当一日銀二〇匁、宿代一ヶ月銀二枚、賄道具代銀四枚、物書料金一五両、雜用金一ヶ月五両、筆墨紙蠟燭品物。

・御徒目付・与力・御徒目付勤方 御暇金一〇両、御朱印 人足二人・馬二疋、御証文 御長持二人に一棹、御扶持方七人一倍、御手当一日銀一五匁、宿代一ヶ月銀一枚、賄道具代金三両二分、雜用金一ヶ月四両二分、筆墨紙蠟燭品物。

・御普請役元締 御暇支度金四両、御証文 本馬一疋、御扶持方五人一倍、御手当一日銀一〇匁、宿代金一ヶ月三分、雜用金一ヶ月五両、筆墨紙蠟燭代一ヶ月金二分。

格富山元十郎、御普請役寺澤治郎左衛門、御小人目付勤方高橋次太夫、同松田仁三郎、水主同心（政徳丸船頭）露木元右衛門らの幕吏が御用船政徳丸（一二〇〇石）に乗船して、品川からアシケシ（当初はネムロを予定）までの海上試乗として出帆した。この船は三月二十四日に品川を出帆し、強風と濃霧に悩まされ、ユウツ沖で樽前岳を見て北上し、エリモ崎を廻って六月一九日に目的地であるアシケシ湊に着いたが、三ヶ月を要するものであった。

幕府は東蝦夷地への直接海路を開くことに強い執念を燃やしており、寛政一年三月浦賀で神風丸（一四六〇石）を新造した。この船により天文測量で方位を定めて、東蝦夷地への直接航路を開こうとするものであった。ただ、この船の水主長川仲右衛門には天文測量の術がなかつたので、これに長けた者を乗船させて、海上から観測した測量図を作ることにし、当時渋川主水天文方で天文、暦法の手伝をしていた津和野藩土堀田仁助に目をつけたのである。

蝦夷地御用沖乗御船天文方差添差遣候申上候書付

松平 信濃守

石川左近将監

羽太庄左衛門

大河内善兵衛

三橋藤右衛門

天文方渋川主水手付

御扶持方五人扶持 堀田仁助

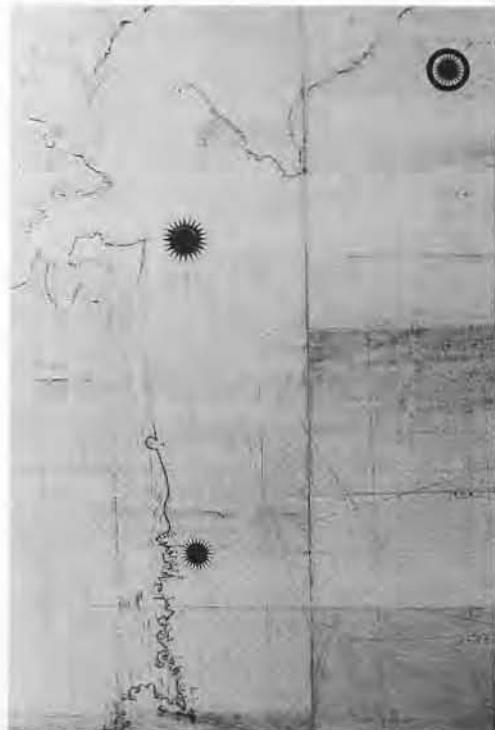
右者、此度蝦夷地御用沖乗御船出来仕候處、水主長川仲右衛門儀、天度之儀者未熟ニ付、書面之者天文暦學等數年修練仕、暦作御用手伝被仰付、右ニ付御扶持方等も被下置候者ニ御座候間、右御船乗組御用申渡差遣申度奉存候。今度之御用向之儀者海路重之儀ニ

も有之、針路を以方角を定候而已ニ而者未欠所有之候間、星宿を測り、通船仕候様ニ至り候ハバ、如何様之大洋ニ而も無難ニ可有之趣ニも御座候間、亀井隱岐守渋川主水江も懸合候處、指支無之旨申聞候。依之奉伺候。伺之通被仰渡候ハバ、隱岐守主水江も一通御沙汰被成下候様仕度奉存候。且御手当之儀者、同人弟子共之内修行致度、追々御用立候もの両三人も為召連候間、彼是費用も相懸候ニ付、御普請役並之通被下置候様仕度奉存候。依之申上候。以上。未三月。

（「休明光記附録」卷之二）

幕閣の許可を得た堀田仁助は御普請役並の待遇（支度金三両・御証文）をうけ、寛政一年六月二七日門弟三人、召使三人を従え、御用船神風丸で品川を出帆した。彼が持参した測量機器は、オランダ製イスタラビ（渾天儀）、象限儀、望遠鏡、時計、磁石を天文方から貸与され、堀田自身も象限儀、渾天儀、星図鑑、天球儀、その他を持ったが、関東・陸奥地方沿岸の地形を海上より測量しながら蝦夷地に向った。神風丸は天候に恵まれ、途中仙台領や南部領に立ち寄りながら、八月四日に宮古湊に入港した。逆風のため二〇日ほど日和待ちをしたが、二十五日には順風を得て出航し、二八日まで陸を見ることなく航海して、二九日に無事アシケシに到着した。これまでの航海は陸奥地方と蝦夷地の沿岸を目視しつつであったが、今回は宮古湊から東蝦夷地への外洋航路が開かれたことを意味し、僅か五日間の船旅であった。

堀田仁助により作製された地図は関東から陸奥の沿岸の地形は主として海上から観測した測量図で、天文観測が積極的に利用されたが、わが国でも一六世紀末から一七世紀初期にかけてオランダやスペインの影響により、八幡丸や朱印船などが渾天儀や象限儀を用いて恒星を観測しつつ東南アジアまで航海していたという。これが鎖国によつて



略)。蝦夷地御絵図之内、測量可仕箇所下げ札仕り、差上候様被仰付奉候。然所私儀彼地不案内に御座候故、土地形勢をも相弁不仕候得共、御絵図之形に隋、前則無之場所下げ札仕奉入御覽候。松前よりアツケシ迄は前測有之候間、下げ札不仕候。但御府内より蝦夷地まで之地図、方位之御見合に相成候様測量致候には、測量連続不仕候而是難相成儀に御座候間、松前よりアツケシ迄之内に而も、取続之為測量仕候儀も可御座候。

帰路は東蝦夷地の沿岸を測量しつつ陸路によつて松前に達し、各地でイスターを用いて天文観測を行つて緯度を計測したが、忠敬のそれと比べやや誤差が大きかつた。堀田の「従江都至東海蝦夷地針路之図」は関東・陸奥の海上測量と蝦夷地の陸地測量を加えたものであつた。

堀田・伊能の緯度測地値(北緯)

地名 堀田 伊能 実際

アツケシ	四三度二二分	四三度〇二分	四三度〇二分
コンブムイ	四三度一二分	四二度五七分	四二度五七分
クシリ	四三度〇七分	四二度五八分	四二度五八分
シラヌカ	四三度〇七分	四二度五八分	四二度五八分
ビロウ	四二度五一分	四二度五六分	四二度五七分
ミツイシ	四二度二一分	四二度一七分	四二度一七分
シラヲイ	四二度二一分	四二度一三分	四二度一五分
アブタ	四二度三一分	四二度一七分	四二度一七分
箱館	四二度五九分	四二度三〇分	四二度三二分
松前	四一度四九分	四二度三一分	四二度三二分
	四一度〇八分	四一度四七分	四一度四六分
	四一度〇〇分	四一度二八分半	四一度二六分

(日本の北辺の探検と地図の歴史) より筆者作成

松平信濃守が目指したのは海上航路のための天文測量であり、堀田が帰路の時に乗船せず、陸路により帰ったのは不埒な行為だとしていた。忠敬の方は緯度の測定は勿論だが、正確な沿岸地図を作ることを目的にしており、海岸の凹凸を測るには陸路による連続測量を必要とした。したがつて堀田と忠敬の地図はおのずと性格を異なるものであつた。堀田の航海図によつて江戸から蝦夷地への距離と方位が大まかに明らかになつたが、天文測量が航海と測量に利用された、わが国では画期的な企てであった。(日本の北辺の探検と地図の歴史)

伊能忠敬の蝦夷地測量交渉

天文方高橋至時が子午線一度を測ることを目的に、弟子の伊能忠敬を蝦夷地に派遣することにつき幕閣の了承を得たのは寛政一二年(一八〇〇)の正月頃であつた。ただ、担当である蝦夷地取締御用掛は堀田の時と同様御用船政徳丸に乗船して海上から陸地の方位を測りながら蝦夷地に渡り、帰路も船によるものとしていた。前年の堀田の海図に満足していなかつたこともあるが、身分が百姓であるため御証文は出せない、大量の測量機器運搬は関東・陸奥の村民に助郷人馬の負担をかけることから、船便としたのである。

寛政一二年二月一五日幕府の奥祐筆秋山松之丞から高橋天文方に、伊能の国郡村名、地頭の姓名、所持機器の寸法を記して提出するようとの手紙が届いた。高橋は忠敬を呼び「伊能勘解由 国所並所持機器之覚書」を作成して一六日に提出した。二二日には向井将監組露木元右衛門が測量機器船積について面談したいと忠敬宅を訪ねて來たが、不在だったので二三日に再度訪問があつた。露木は朱の入つた高橋天文方取り次ぎの書類を持参していた。若年寄立花出雲守の指示で、蝦夷地には船で行くことになり、積み込む測量機器の調査であつた。

そこで、高橋天文方は若年寄堀田撰津守に船で蝦夷地に行くことは、本人は海上測量の知識がないこと、長海上は不得意であるから、測量機器を減らしてもいいので陸路通行にして欲しい上申した。

四月七日になり忠敬は、松平信濃守宅の寄合に呼ばれたが、夜食を頂いた後、側近細見権十郎の案内で居間の奥の間に通され、松平信濃守、石川左近将監、羽太目付がおり、一同は次の間に座つた。信濃守より陸路と海路についてお尋ねがあつた。忠敬は蝦夷地より奥州、常陸、上総、下総、房州を経て府内まで海辺で北極度方位を連測すれば海上測量と違い、真の方位里数、海路が分かる。陸地通行となれば測量機器の数量・貰目を改め、人足は自分雇いで運びたいと答えた。

二二日に忠敬は松平信濃守宅を訪ね、御勘定鈴木甚内と細見権十郎に面会した。二人から人馬の御証文は出ないこと、御上から少しだけ下付金は出るが、自分で足し金しても蝦夷地測量を勤めるかと確認された。忠敬は下付金がなくても、道中滞り無きお触れさえ出して下されば自分入用をもつて御用を勤めたいと述べ、求めに応じてその旨の書付を提出した。(伊能忠敬測量日誌第一巻)

以書付奉申上候

一、蝦夷地測量御用に付、先達而測器之儀、蝦夷地に而人足継立、又は船に而継送り之儀御伺奉申上候所、何れ継送之儀は不容易之段御利解被仰聞奉畏候。依之勘弁仕候所、無拋測器は私方に而人足相雇、御府内より蝦夷地往来持運ばせ候可仕奉存候。右雇人足賃銀等は自分入用に而相賄可仕候。

一、相残候測器之儀は、御船便に御積立被下候に奉願候。尤御船延着仕候ても、右之諸器は測量之場所に而手輕に相仕立候共、松前辺に而仕立候而も差支無之様可仕候。

一、私持參仕書籍算盤紙筆、並召連候弟子等衣服類之荷物も御座

候間、人馬差支有之候而は測量差支難儀仕候間、御府内より松前迄之内、宿々人馬差支無之様御触奉願上候。

一、私召連候者之夜具は、其場所に而押借仕度奉存候。以上。

四月二二日

伊能勘解由

蝦夷御掛 御役人中様

（伊能忠敬測量日誌第一巻）

（休明光記附録）巻之五

忠敬は、自分で不足金を負担しても蝦夷地測量を実施したいので、持参する器具の人馬に差し支えのないよう添触を願い、残った器具は船で蝦夷地に運んで欲しいと述べたのである。

その後も蝦夷御会所に出向いての交渉が続けられ、人足六人、馬二疋、蝦夷地においても同数でお願いしたいとしたが、蝦夷掛は厳しい査定を行い、御定賃錢による人足三人・馬一疋（蝦夷地では人足三人・馬一疋）となつた。閏四月八日には若年寄立花出雲守より伺いの通りとの沙汰があつた。

高橋作左衛門弟子 西丸小姓組番頭津田山城守知行所

下總国香取郡佐原村百姓伊能三郎右衛門父

伊能勘解由

申五拾壹歳

右勘解由儀、呼出、測量道具等蝦夷地廻し方不自由ニ而、人足等過分召連候儀不相成段候、私どもより委細為申聞候處、右道具類者船積陸荷等可相成丈減少仕候而、何連にも罷越申度心願之趣ニ申聞、御手當相願候存寄も無御座、自分入用を以罷越候積申出候處、右申出候趣ニ而者差而故障之筋も相見江不申、測量之儀者何連も相試可然儀ニ奉存候。依之蝦夷地江出立仕候儀ニ可申渡奉存候。右ニ付、勘解由儀、自分入用を以可罷越段申出候得ども、測量出来之上、御用之品ニ付、私ども評議仕候處、當申年御雇ニ仕

候町医師並一日限七匁五分ヅ、日割を以、御手當被下候様仕度奉存候。蝦夷地御入用之内より差出候心得ニ御座候。依之奉伺候。以上。申四月

松平 信濃守

石川左近將監

羽太庄左衛門

このように伊能忠敬の蝦夷地測量実施の決定は寛政二年閏四月八日に若年寄立花出雲守の承認により決まつたが、忠敬は一五日に自分

の心境を綴つた書付を松平信濃守に渡した。「地図を正確に作る術は、第一に北極出地度、次は方位である。高橋天文方弟子となり六年、昼夜精を出して励み、今は測量等も間違いないほどになつた。これには身分不相応の出費もし、隠居とは申せ相済まぬことである。せめて後世に見合う地図を作りたいと思つたが、大名・旗本様の御領内御知行地を間棹間繩で測つたり、大道具を持ち運んだりすれば、御役人衆よりお咎めを受け、私身分ではかなわぬことであつた。この度公儀のお声掛けで、蝦夷地へ出立することになつた。蝦夷地の図と奥州より江戸迄の海沿いの地図を作り、差し上げたいと念願している。當年中に地図は全部出来上がらず、凡そ三年程手間をとるが、この上は何卒蝦夷地より江戸迄の地図作りに、御用のお声掛けをお願いする」（伊能忠敬測量日誌第一巻）より要約。

忠敬は蝦夷図と関東・陸奥の沿岸地図の作成には三年程を要すると考えていたようで、第一次測量出立を前に、次の測量について幕吏への根回しとも言うべき書状を提出していた。

忠敬が蝦夷地測量に最終的に持参した機器は「持人足等も少なく、大方位盤杯は持参難仕、箱館に差し置、其後は小方位盤に而測り申し

候。勿論、北極出地度之儀は、象限儀を以、相測り申し候間、相違いも無之儀と存候得共、方位里程之儀は、間棹・間繩等も用ひ不申、足数を以相定め、小方位盤に而見通し等仕候事故、真之地図とは難申上候」。(伊能忠敬測量日誌第一巻)とあるように、残りの機器の海上継ぎ送りを止め、陸路だけによる必要最小限度のものであった。

あとがき

伊能忠敬は寛政二年閏四月一九日江戸深川を出立し、五月二二日に箱館に到着した。蝦夷地でも多くの幕吏に会つて、測量旅行のため添触の発行をはじめ、止宿、人馬の継ぎ立て、川舟使用などで世話を受けた。もし、この時期に幕吏の詰合がいなかつたら、スムーズな測量は出来なかつたのではないかと思う。いかに幕吏のお声掛けが大きなものであつたかを改めて知るものである。

(ほりえ としお・苦小牧駒澤大学非常勤講師)

伊能景利コレクション展

佐原の伊能忠敬記念館では第30回の収藏品展に併せ、「伊能景利コレクション展」が開催され、伊能忠敬の義理の祖父にあたる文化人伊能景利の人物像と、彼が収集した全国の珍しい石とその入手方法などが紹介されています。(伊能忠敬記念館作成資料による)

□会期 平成15年5月27日～平成15年7月27日(月曜休館)

開館時間など)確認のうえお出かけ下さい。

電話 0478・54・1118

<http://www.city.sawara.chiba.jp/kinenkan/>

□収藏品展

国指定重要文化財「伊能忠敬遺書并遺品」の中から忠敬が使用した観星鏡(天体望遠鏡)と伊能大図は文政元年(一八〇四)版の石川、富山県方面の図三点が紹介されている。

伊能大図(重要文化財・館蔵)

自江戸歴尾州赴北国至奥州沿海図第十四之三

自黒島歴狼烟至宇出津

自東岩瀬至哥

第十五

自哥至今町

□景利コレクション

伊能家が伝えてきた資料のなかに、伊能忠敬の義理の祖父にあたる景利(一六六八～一七二六)が収集した全国各地の石の標本があります。

景利が生きた江戸時代の中ごろの佐原は、江戸とのかかわりを深めながら、利根川水運を軸とした町場として大きく発展していく時期でした。そうしたなかで景利は佐原村本宿組の名主として、また酒造業を営む伊能家の当主として公私にわたりて活躍しますが、そのかたわら、村の古事や古文書類をまとめた『部冊帳』や『千代の古道』を編さんするなど、学芸的な面でも精力的に活動していました。また東国や西国、四国への巡礼や出羽三山や伊勢神宮などの全国の寺社へ出かけるなど、信仰的な嘗みも積極的だったようで、その際のお土産的な意味もあつて各地の石を収集したようなのです。

景利が収集した岩石類は、入手目録によれば34種類ありました。収集したのは元禄17年(一七〇四)から享保2年(一七一七)までの約13年間で、景利が36歳から49歳までの間です。現存しているのは22種類ですが、なかには宝永4年(一七〇七)の富士山噴火の際に佐原へ降つた火山灰などの非常に珍しい物も含まれています。

また、石の産地を見ると佐渡、津軽、紀伊、土佐のあたりに集中し

ています。これは景利の行動範囲と関係があるのですが、そのほかにコレクションの多くが六十六部という全国を巡る宗教者からの提供によるものなので、提供している六十六部5人の廻国経路とも大きな関係があるようです。

ところで、こうした奇石の収集というのは江戸時代に各地でブームになるのですがそのピークは景利より約50年後の宝暦年間になつてからのことです。景利の収集活動はそうした全国的な流れから見ても非常に早い時期のものです。また、収集の担い手となつて六十六部の廻国が全国規模で流行するのは宝永期頃からで、そうした彼等を受け入れる村の側でも、行者を泊めるなどの施しは自分達の先祖供養になると考えられていましたので、景利も亡くなつた父母を弔うために宝永3年（一七〇六）に57人の行者を宿泊させているのです。

景利コレクションは、こうした江戸時代半ばにおける、全国規模で

文化交流が活発化してくる社会情勢を背景に、出来上がつたコレクションだといえます。

八、九月は「忠敏顯彰の歩み」「万国全図」が予定されています。

□主な展示資料

1 伊能景利日記	20 冊	元禄11年(伊能淳氏蔵)
2 部冊帳・前巻	12 冊	正徳4年(館蔵)
3 部冊帳・後巻	14 冊	享保11年(館蔵)
4 千代古見知	7 冊	享保6年(館蔵)
5 続千代古見知	9 冊	享保10年(館蔵)
6 入目録	1 緯	享保2年頃(伊能洋氏蔵)
7 景利収集石標本等	21 種	後記参照
8 日本廻国六十六部行者宿泊帳	1 冊	宝永3年(館蔵)

□景利収集石標本等

（「入目録」より作成）

岩石名	産地	入手方法
1 木葉石	渡国閑村	宝永3・10
2 山ノ神矢ノ根	佐渡国閑村	宝永3・10
3 おぢめ石	佐渡国相川	宝永4・5
4 石のわた	佐渡国相川金山	宝永3・10
5 仏舎利石	奥州津軽舍利浜	宝永3・10
6 小石	奥州津軽今郡	（不明）
7 寒水石	羽州湯殿山之内近所	元禄17・7
8 那智黒石	紀伊国那智山下浜うぐい村浜	宝永5・5
9 酢貝	紀伊国みなべ峠	宝永5・5
10 子安貝	紀伊国みなべ峠	宝永5・5
11 白青石	紀伊国宮原川之河原	宝永5・5
12 白丸石	淡路国千光寺近所下浜	拾う
13 光り岩ノかけ	阿波国燒山寺近所さしづ村	正徳6・5
14 蛤貝	阿波国さかせ川	正徳6・5
15 石蛤	土佐国神峰のふもとたりの浜村谷	正徳6・5
16 明星石	土佐国	宝永3・10
17 笹ノ葉	伊予国笠山観音寺奥の院頂上	正徳6・5
18 蘇鉄実	伊豆国熱海	宝永7・9
19 紫寢殿御庭の砂	京都禁裏	享保2・7
20 毛	佐原へ天より降る	宝永4・11
21 富士焼灰	佐原村へ降る	宝永4・11
22 昼過始て当村へ降る	朝このあたりへ降る	

伊能忠敬の島原領測量と島原藩の地図作製

越年。

松尾 卓次

一、初めに

一〇〇〇年（平成一二）は伊能忠敬が日本地図作製を目指して全国測量へ出発して二百年となるので、各地で記念の行事が開催された。当地、島原でも「伊能ウォーカー」「島原ちびっ子伊能測量隊」「文化講演会」などが開かれた。

「承知のよう、伊能忠敬の全国測量の始まりは寛政二二年（一八〇〇）閏四月一九日である。島原領の測量は、文化九年（一八一二）一月四日から一九日までのことであった。伊能測量隊が訪れた時は、寛政の大地変から二〇年後であつたから、島原城下町を埋め尽くした眉山の崩壊、その時に生まれた九十九島などの様子が克明に記録されている。一夜にして生まれた三九もの島々へ直接わたつて測量し、島原大変の科学的研究へ貴重な資料を与えていた。

伊能の測量は、単なる地図づくりだけではない。島原藩では、それを契機に正確な領内地図、各村図作製を目指した。「大日本沿海実測全図」の完成前に九州図や領内図などを入手している。その後、それらに基づいて正確な領内地図や村図を完成させ、治世に役立たせた。改めて伊能忠敬の業績の大きさが分かる。以下、伊能忠敬と島原の関わりを述べる。

二、伊能の測量と島原藩の関わり

文化六年（一八〇九）九州測量について幕府より島原藩へ通知。その準備。伊能一行が中山道と山陽道を測量し、九州の小倉で

七年（一八一〇）九州の豊前・豊後（島原領飛び地）・日向・大隅・薩摩・肥後の海岸と肥後・豊前街道測量（第七回測量）。

大分で越年。

九年（一八一二）再度九州に渡り、筑前・筑後・肥前の海岸、

種子島屋久島、その他九州の諸街道、島原半島などを測量。

島原より手紙を出す。肥前相浦で越年。

一〇年（一八一三）九州の残り海岸・街道、壱岐・対馬・五島。

中国の残り街道など測量、姫路で越年。

一一年（一八一四）近畿、中部地方の残り街道など測量して江戸へ帰る。三年かかる第八回測量。居宅を江戸八丁堀亀島町に

移転。伊能、島原藩数寄屋口上屋敷へ挨拶回り。島原藩士奥村嘉兵衛、同奥村立助より雁一羽賜る。

一二年（一八一五）奥村嘉兵衛の書状届く。

一三年（一八一六）「大日本沿海実測全図」の作製に取りかかる。

萩原平来る、麴漬梅賜る。渡辺啓二郎（旧姓尾形慶介）へ酒肴贈。国岡の事を談す。奥村嘉兵衛来る、雁一羽賜る。

一四年（一八一七）奥村嘉兵衛来る、菓子持參。九州六分図並びに島原領一〇間一分の図の地図依頼され、来春帰国時までに渡すことを約束。度々訪問記録あり。

「大日本沿海実測全図」の製作を続けるが、健康が衰える。「大日本沿海実測全図」伊能忠敬四月一三日、江戸八丁堀の屋敷で死去、七三歳。浅草源空寺の高橋至時の墓側に葬る。度々島原藩士の見舞い記録あり。

島原藩、九州地図などの謝礼代金（一五両一分）支払い。伊能図をもとに島原領内図を仕上げる。

四年（一八二二）「大日本沿海実測全図」完成、幕府に提出。
七年（一八二四）島原藩、地図測量器具等を大野弥三郎から購入。

一〇年（一八二七）奥村立助ら領内測量。島原藩、村絵図作製。
天保初年（一八三〇頃）領内図完成。

三、伊能忠敬の島原領内測量

文化九年（一八二二）、幕府の天文方伊能忠敬一行が島原領内の測量にやつて來た。一月四日に諫早領森山村から愛津村へ入国。島原半島をぐるりと一周、一九日諫早領有喜村へと去つた。「伊能忠敬測量日記二十」をもとに、島原領内測量の様子を述べる。

伊能にとつては八回目の全國測量時であり、九州路を鹿児島まで行つて屋久・種子島へ渡り、西九州へ向かつて諫早から島原へ入つた。その後大村、平戸を測量して壱岐、対馬、五島へも渡つて長崎へ出て、小倉をへて江戸へ戻つた。この間九一四日、二八七〇里の長行程であつた。

一行は一〇名、従者を加えると一九名で、二手に分かれ、本隊は伊能忠敬と永井甚左衛門、門谷清次郎、尾形慶介、久保木佐助。別隊が坂部貞兵衛を長にして今泉又兵衛、箱田良助、保木敬藏、大山甚七であつた。それに島原藩から郡方役林鉄兵衛と勝手方役奥村立助たちが付き添つた。また各村から庄屋たちが付き、人足と馬を出した。

四日は愛津村庄屋深浦九郎左衛門宅泊り。庄屋の代表として愛津村庄屋深浦九郎左衛門、加津佐村庄屋菅市左衛門たちが挨拶に出る。翌五日は愛津から西郷までの各村を測つて、西郷村庄屋宮崎五兵衛宅に泊る。

六日は烈風の中を先手は六つ頃出て、坂部、今泉、門谷、尾形、佐助は、島原領湯江村釘崎名（釘）印より初め、大野村、東空閑村、三之沢村、三会村を測量、島原城下に入る。後手は六つ後、西郷村出立。伊能、永井、箱田、保木、甚七らは同所（西）印より同村、佐賀領西神代村枝村を測り、島原領土黒村、多比良村、湯江村へ。枝釘崎名、先手（釘）印迄まで測る。両手一同、八つ半後、島原松平主殿頭の城下へ着く。

止宿は本陣が古町の内、堀町の町年寄中村孫右衛門宅、別宿は古町の内、中（上）町乙名古賀源左衛門宅、同じく木田伝左衛門宅。城下入口で町方吟味役川村祐助と渡辺太平が出迎える。止宿に町奉行板倉角馬が出る。此の夜は晴れ曇りで天測。

七日、晴天。島原城下に逗留して測る。朝六つ出立、門谷、尾形、保木、甚七は三会村の海辺より始める。島原市中、宮町（旧町跡で大変後田畠となる）、これまで街道は大概海辺に付いている。右側は宮町、左側は三会町、三会町の内の中町、同じく上野町、有馬町の内の新町。有馬町の内、大手橋は幅五間、同じく万町、古町、右側は古町の内、堀町、左側は有馬町の内、堀町、左右合わせて堀町一丁目という。右は止宿で町年寄の中村孫右衛門の測所前に至る。これより先も市中である。大変後に田地になる。

これまで街道、これより湊へ測る。堀町三丁目、右に一向宗江東寺、五丁目の橋は幅三間二尺。人家が続き船着場に至る。今村名は大変時に人家が損亡した。この湊は新たに人家が出来たものである。これより海に入り向かいの島へ至る。これより汐入橋（三間三尺）を渡る。有馬町の内、舟津の人家前で打止め。
永井、今泉、箱田、佐助は島原城下有馬町の内、中小島、馬島、恵比須島、平島、岡高山島を測り、そこより乗船して七つ前に宿へ帰る。

その夜はまた晴天で測る。

八日、晴天。同所に逗留して測る。坂部、門谷、尾形、保木、甚七は同所市中の海辺迫分けより始める。入江の口を渡り二一間、表海へ横切る（一五間）。それより大手前に昨日残した杭に繋ぎ、これより入江を横切る。高島の鼻という州先に向かい、入江の亀藏山へ繋げる。

永井、今泉、箱田、佐助は島原村属で寛政四年の大変後に出来た新しい島を測る。長島より初め、長島は一周四町四一間四尺。草島、沖島、冲高島、埋瀬（満潮時には隠れる）、中島の小島、磯高島、中島の大島、岡ノ高山島、串島、船中で昼食。出外島、茂七島、木場島、出口島、堂崎島、横島、無名島、山口石島、と測つて、それより乗船して七つ後に宿へ帰る。この日、奥村嘉平（嘉兵衛）から島原侯の使者として国の産物を贈られる。品は別記。夜は曇りで少し測る。

九日、晴天。同所に逗留して測る。字界山、安徳村字出山まで。字南入江で打止め。それより乗船して八つ半頃帰宿した。

門谷、尾形、保木、甚七は島原村地内、字界山より始める。安徳村枝新現島を測る。界瀬（瀬戸幅三九間）を渡る。若葉島は周囲一町斗り、中ノ山島、中ノ南島、上ノ島、下ノ島、中ノ島、岡ノ島、松島、伊勢島、大島、惣兵衛島を測る。それより乗船して八つ半後帰宿。この夜は測れず。

一〇日、晴天。同所に逗留して測る。坂部、永井、今泉、箱田、佐助は堀町二丁目と三丁目の界から始め、街道を測る。水頭小路、中町。右に一町ばかりに三十番神護国寺がある。白土番所、これは山番所。寛政四年子年大変後の荒地の界筋である。雲仙岳への道があり、三里一九町という。安徳村庄屋大町只右衛門宅で小休止。この村は往古に安徳帝の御冠が流れ寄せられた故に名がついた。

門谷、尾形、保木、甚七は安徳村の内、新成の島々を測る。三つ島

の大島より渡る。天草島、南島、北島、横島、天草の南島を測る。湊島より始める。この島は瀬続きで四つに切れるが、今は一島となる。

両手共に九つ後宿に着く。この日江戸へ書状、妙薫宛を渡す。

（城下には四日間滞在して島原市街をくまなく測量している。また島原大変で生まれた島々にも渡海して詳しく調査している。大地変後二〇年になるが、市街地が見事に復旧し新しい町や湊が生まれ繁栄していることが分かる。これらの測量地点は、「島原領下絵」（写真①）が残されているから、その通りに現在もたどる事が出来る（「島原市街測量行程復元図」図①）。その後二手に分かれて、本隊は南日西目を回り、別隊は千々石道から西目を測り、島原半島を一周する。）

写真① 島原領下絵

図① 島原市街測量行程復元図



一一日、晴天。七つ半頃島原城下を出立。大きく手分けして坂部、今泉、箱田、保木、佐助は千々石街道を測る。坂部たち別隊は島原城下を出發して、杉谷村山寺名坪浦、三会村木崎名・東空閑村浜口名一本松、大野・湯江・多比良三村論所魚洗河、土黒村下田代、平石崎と進んでここで昼食休み。千々石村小倉名大掘、牧ノ内、白津へ、太刀馬場を通り樋口で打ち止め。総計四里一八間二尺。それより半里程行つて千々石本村船津名に六ツ後着き、庄屋宮崎平八郎宅に止宿した。

本隊の伊能、永井、門谷、尾形、甚七は島原村枝今村名の湊より乗船。安徳村枝北名の海辺より始める。深江村を測り、布津村まで調べて田浦市郎右衛門庄屋宅泊り。(ここで長さ一一間、横九間、高さ四尺と八方に広がる名松を見ている。)

一二日は有家町村まで進め、馬場源之丞庄屋宅に泊つた。別隊は昨日より終日風雨で同所に逗留する。

一三日は南有馬村まで測つて竹馬三郎右衛門庄屋宅に泊つてゐる。別隊は千々石村小倉名樋口より始めて六ツ半頃小浜村着、庄屋木多駒太郎宅と百姓伊兵衛宅に止宿。

一四日は原城跡に立ち寄る(浦田の老人治右衛門から島原の乱時に農民軍が全滅した様子など詳しい説明を受ける)。口之津村まで測量、本多治郎左衛門庄屋宅に泊る。別隊は小浜村から温泉へ登り、測量一里三四町五五間半。下山して再び小浜村泊り。

一五日は悪天候のためにここで逗留。別隊は北串山村から測量して南串山村庄屋馬場甚左衛門宅泊る。

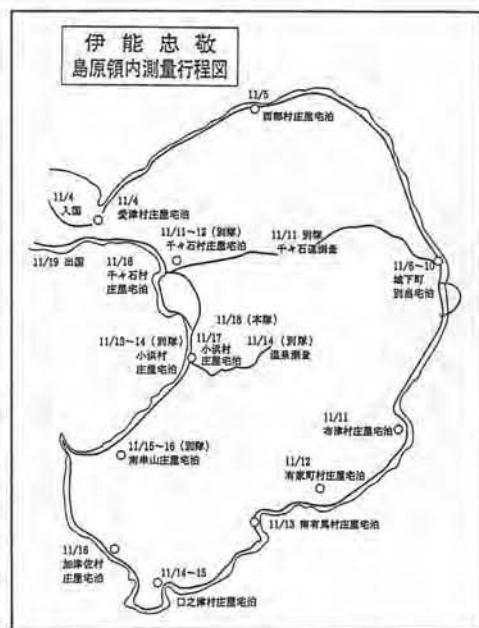
一六日は加津佐村まで測量、菅市左衛門庄屋宅に泊る。別隊は風波高く南串山村滞在。

一七日は南串山村まで測り、小浜村庄屋木多駒太郎宅に泊つてここで別隊と合流した。別隊は南串山村から海沿いに加津佐村津波見まで

測量して再び小浜村へ引き返し、庄屋宅と本多湯大夫宅に分宿。ここで本隊と合流する。

一八日、本隊は小浜村猿岩より温泉山へ上がり、小地獄、四面社、新湯と測つて山を下り、千々石村着。官崎平八郎庄屋宅泊り。別隊は小浜村から千々石街道沿いに葛坂峠、千々石村木場名、野田名、船津名を測つて一日に残した埋杭につなぐ。千々石村着。

一九日両隊は千々石村を出發して船津名より測量始め、千々石川を渡り、愛津村海辺釜床につぐ。ここで測量を終わつて唐頃村へ入る。領境まで奥村嘉兵衛送別。着後、加津佐村庄屋菅市左衛門、伊福庄村屋木多権右衛門、愛津村庄屋深浦九郎左衛門三人総代にて来る。



図② 島原領内測量行程図

(こうして一六日にわたつた島原領内の測量が終わつた。いずれも昼間は各地を測量して、夜は泊所で、天体観測の毎日であつた。) (図②参照)

四、伊能忠敬の島原出しの手紙

私や其外差添衆内弟子侍まで一同、別条なく昨六日肥前国島原城下に安着致し候。御悦び給うべく候。：

一、当島原領測量済み後は大村領、平戸領へ罷越し、両方の内で越年し、来春三、四、五月には壱岐、対馬、五島へ相渡り、未から長崎へ立寄る道順を本家書状に記している：

一、私が天文暦学を好み、國々測量と渡世に名聲を掛けていられるのも、一切渡辺家（故郷佐原の庄屋）のお陰である。質素が大切で、第一に三治郎のため、第二に子孫長久を基にと、利て（リテ・息子の嫁）には念の為に言つてもらいたい。：年が明ければ六七歳になり、元氣に候得共、歯は一切になり時々痛み、奈良漬けも食べ兼ね、豆腐とカブヲ、ひし干しなどがよい。：来年は閏一月もあり候、暮れまでには帰府相成るべき候。：

（そのとき伊能は六六歳と高齢で、歯痛で悩んでいた。また子を亡くしている。来年末に帰府と書いているが、さらに一年遅れている。）

五、測量の実際

その土地の測量が決定すると、老中名で通達が出て、必要人馬等の提供や測量先と江戸との通信取り次ぎなどの便宜等を各藩江戸留守居役へ伝える。それが国元へ伝えられ、準備に取りかかる。また勘定奉行などから「先触」という命令書が出る。村役人などの準備と土地案内、人馬提供と器具運搬など具体的な指示が伝えられる。

それに従い、後記のような準備の中に測量隊がやつてくる。測量前に、各村から土地の様子をまとめた「書上帳」を提出させる。それを基にその地を測る。測量データは野帳に記録し、それに基づいて下絵を描き、また範（アラ）絵を描き、後で地図にまとめる。これは帰京

後のことである。現在、島原関係では、島原領野井村と神代領内四村の書上帳、島原領内下絵、九州全図などが残っている。

測量の方法は、間繩と間棹を用いる。梵天という目印の棒を立て、その間の距離を測り記録する。歩測で通す場合もあった。伊能たちは何年も歩測を試みているから、その歩測データは正確であった。量程車を作つたが、使い物にならなかつたようだ。距離測量と同時に方角も測定した。磁石と「杖先羅鍼」という、杖の上にコンパス（羅針盤）をつけた方位盤を用いた。

各宿泊所で夜間に北極星や恒星を観測して、その地の緯度を算出している。島原では、北極高三度四七分半（実際は三二度四六分四八秒）としている。この場合は象限儀を用いた。

六、島原藩と神代領の対応

島原藩の記録が少ないが、榎原郷土史料館に数点ある。また神代領の分はきちんと残つていて、長崎県立図書館や佐賀県図書館に所蔵されている。これらの資料を基に、当地の対応を見る。

島原藩は文化六（一八〇九）年、豊後・豊前領へ伊能測量隊が入国するようになつたと、幕府勘定奉行のお触れで知る。そこで豊後側だけでなく、島原領内でも対策を立てたようである。そのことを示す史料綴「文化六年豊州御領測量方取斗一件」がある。

「測量方御役人去る文化二丑年中巡国儀これ有り候處、一旦引取に相成り。尚又当年江戸出立巡国これ有り趣にて、左の通り御勘定奉行御連名の御触書到来致し候。」

「御触書」

追て候触書早々相回り承知の旨、別紙御書相添え留宿より主膳様御

役所へ相返させ候、以上。

一、人足八人 天文方 高橋作左衛門手付手伝

馬三匹 伊能勘解由

長持一棹持人足

一、馬一匹づつ 手代筋

坂部貞兵衛 下役

青木勝治郎

永井要助

右は此度九州筋其外測量御用の為差遣わされ候に付き、書面の通り無賃の人馬下され候間、宿宿村々に於いて其旨相心得往還共差出すもの也。

巳（一八〇九）八月二三日 若狭、兵庫、伊勢、主膳、美濃

『測量方の御役人追々相越され候に付き御領分中諸事取斗い向手当左の通り

「宿用意」

一、宿の儀、高田村床屋並びに医師白川玄亭方式軒、長洲村にては大庄屋並びに小庄屋、妙満寺方用意の事。

一、床掛物

熨斗三方 但白木

御證文譜文台三方

刀掛

一、次の間刀掛人數に応じ見合せ 但 小き方好の由

疊損候分斗表替

一、障子切張り

……

』

——以下、湯殿や雪隠の修理（風呂桶は新規に及ばず有合せ新しい物を取集める）、宿泊所への出迎えのこと、その服装のこと、賄は一汁三菜朝昼夕共、昼食は手軽に仕立、夜分は吸物肴見合、酒差出し用意など、夜具は絹（下役は奇麗な木綿夜具）、浴衣新規のこと、泊村夜回り拍子木打ち火回りのこと、等々細かく二八項の達しがある。

『「測量場其外用意」

一、道筋古道具不淨物等取片付け候事

一、道筋町場見苦敷き所藏常盤畳みの事

一、測量場見学無用

一、道橋危所取繕い申すべき事

……

』

——このほか、庄屋や人足の提供、絵図面の提出、通行困難所へ船と歩行板の用意、測量場や昼食休場へ毛氈の準備、杭十本かけや四つ用意、紙美濃紙用意、わらじ用意、庭筵二十枚用意等々、書き表すのが大変なぐらい、準備用意するものが四一項目もある。

これら「御触写」「御伝馬役添触写」「右繼送書付写」「測量方島原へ相越候節取斗向」「御證文写三通」は前記の史料綴りにまとめられている。これにより、藩の対応がよく分かり、細々とした事前の準備が大変であつたようだ。

島原領の測量は文化九（一八一二）年のことで、その様子は「伊能忠敬測量日記二十」で分かる。これについては前述の通り。

その時佐賀藩神代領も測量しているが、これは神代領史料で分かる。「神代日記」や「測量師通路記録」が残っている。事前に各村の様子を書上帳で提出させたり、佐賀本藩からの連絡や、諫早領から担当役が来たり、領内での出迎えなどと、これまた大変であった。

一番の問題は神代領での宿泊であったようで、神代町に宿割りを計画していた。しかしそれが免れて、ほつとしている。準備万端の中を無事通過、史料の行間にその安堵感があふれている。一一月二二日の「神代日記」に、すべてが終わり御酒拌領の記録があつて、この測量が一件終了となつていて。以下その様子を述べる。

十一月二六日

一、測量師自然神代泊等にて成らるべき哉斗り難し。諸支度左の通り手当相成り候事。

伊能勘解由殿

大庄屋所

宿主別当判之丞

(省略)

坂部貞兵衛殿

永田喜大夫所

宿主藻右衛門

(省略)

一、人馬宿大門口

興右衛門所

人足貳百人

馬三拾匹

右心遣村役 (以下省略)

十一月晦日

佐賀藩諸役所出役・洪忠太夫より神代郡方へ書簡あり

「測量師は二日諫早泊まり、三日森山村泊まり、一手は唐比村泊まり： 彼は申談御用があるので、明二日諫早町へ御出度、大庄屋も同様罷出、：」

準備品など手当の指示あり

「夜具、家具、茶たばこ盆等の品々、：」——佐賀役人多人数入り

込みその宿泊の準備も指示あり

一、梵天竿三十本

一、斗通桶三つ 是は酒屋有合の品を相備置候

一、とんち 是は掛矢体有合を相備置候

一、杭木三四本

右の品々は御達に任せ相備置候事：」

十一月二日

「明後四日島原領愛津村泊の由、神代泊は相除申し候様申来り、： 神代泊相除き申さる儀不明分に付き西村村役広右衛門を愛津村へ差越し：」

十一月四日

「今夜は愛津村泊まり、明日西郷村泊まりの由決定の所相分り付、古部村浜辺にて小休場飾り心遣い：」

小休場用意

一、菓子 鰻頭 柿 菓子重四与

一、茶 茶碗並茶台等上中下仕分

一、たばこ盆 火鉢 三段 但し小休場裏に二弁所上中下三段に相飾置候事：」

十一月五日

「一、測量師両手共古部村、伊古村通行に付き今朝早天より大庄屋其外付副役々の者共三室村境出停相待居候の所、：通路暫小休所休息未何の滞りこれ無く伊福村昼休みへ着き、：

一、伊古村浜辺に小休場飾仕成儀古部村同様、尤菓子は柿蜜柑等差出候事

一、古部村伊古村共何の滞り無く通路相済み、今八つ時頃西郷村内へ着これ有候に付き、出張役々いづれも神代引取り候事

一、佐賀役々も神代へ引移りに相成り最前の宿割とは相違、大庄

屋並町内へ旅宿申付け候事、：」

十一月六日

「一、正七つ時頃より大庄屋の外付副の者共西郷村境まで出停居候處、未明両手共浜辺並街道通路有り、：無測量の一手は街道筋通行並びに永田喜太夫宅へ小休有り候通り手当これ有り、：共に土黒村の方へ通抜けこれ有り、：」

十一月八日
「一、浜辺測量一手は町別當判之丞所へ御引人相成り、御上より御見立の御酒御料理等差出相成り。追々出立、町裏より測量大津崎相越され、右場所には小休場相飾置き候。右に暫し取寄末、土黒村通抜に相成り候、：付、本文御料理一通りは付副賄方より整仕相成候に付き、此許より構候相及ばず候事、：」

十一月八日
（神代日記より）

「一、佐賀出役の人々神代通路滞り無く相終り候に付き、いづれも今日より諫早の方相越度、人馬申乞候に付き其の手当滞無く引払これ有り候、：」

十一月二二日
（神代日記より）

「測量師通路の節大儀致し候に付き、御酒拝領為され候に付き、罷出で頂戴致し候事、：」

七、島原藩の地図作製

島原藩では領内統治の為、地図の重要性に気付き、その作成に努めていた。

藩では、文化九年（一八一二）一一月に幕府天文方伊能忠敬一行が領内測量にやつてきたのを契機に、本格的な領内地図作りに乗り出した。半月かかった領内の測量に、勝手方役奥村立助を付け、測量術な

写真② 一里四寸図の領内図



などを学ばせている。

その後、奥村立助は、地図製作の準備に取り掛かったようで、文化一年（一八一四）には藩主の参勤に伴い江戸へ登り、雁一番持参して伊能忠敬へ挨拶に出ている。その後何度も伊能家を訪問している。これらのことは「伊能忠敬江戸在府日記」に記録がある。一二年には伊能測量付添役人奥村嘉兵衛から書状が来ていて、地図作成の依頼のようである。その後江戸詰藩士萩原平が訪れた時、「国図の事を談す」とある。

一三年に参勤で江戸に着いた奥村嘉兵衛は早速伊能家を訪問して、雁一羽を贈っている。一四年にも度々訪問して、一〇月一三日には「九州六分の図並びに島原領一〇間一分の図の作成を依頼、来春の帰国までに渡す。」との約束を取り付けている。

「大日本沿海実測全図」の完成以前ではあるが無事入手したようで、文政元年には九州地図等代として一五両二分の受取書が、箱田左大夫（良助）から島原藩郡方役小川仁兵衛へ出されている。また、一連の地図製作費と依頼の挨拶手土産料などとして島原藩は三六両二分費やしたと「九州地図入手費用明細」にある。

このときの図は未発見だが、これをもとに島原藩の地図作製が開始された。早速、同年秋には「一里四寸図の領内図」（写真②）を仕上げ、その凡例に「此図猪野勘解由所制之以島原全図方面一里尺〇八分之割今更改為方面一里四寸之割如其山林原濕潤溪村落者大卒拠所在画形勢之爾」とある。伊能を猪野と書いたのは誤記ではなく、まだ伊能図が公表以前のことであつたので、諸事情を慮つてこう表現したものであろう。この図は伊能図に基づくとあるように、その特徴を持つていて、方位、街道や海岸線の引き方、集落や山地の描き方などは同じである。この図と同様な天保初年作製の島原領内図（写真③）があり、その与え

写真③ 島原領内地図・島原市街の分



写真④ 三会村地図



た影響の大きさが分かる。

七年には測量器具などを江戸の器械職人大野弥三郎から購入。「小方位（三両）、象限儀（一両一分）、コンパス（二分）、厘差（一分）、べて五両一分 壬一二月二十九日 大野弥三郎」との書状が残っている。

これらの器具を利用して、本格的な領内測量が開始された。

一〇年には村々の測量がなされている。「六月、奥村立助殿上下五人、有田村測量、一七日仕廻う」とある。以後逐次村地図が出来上がったようだ、現在領内三三村中、山田、大野、東空閑、三之沢、三会（写真④）、杉谷、安徳、中木場、深江の村図が残っている。これらには凡例があつて、「量地拾間一分之図、文政拾丁亥年五月改 郡奉行川鍋次郎左衛門、測量方奥村立助、絵図方村越仙十郎、：」と書かれている。

天保初年には領内図も完成したようだ、これらの地図は島原図書館

や各役場、旧家に残っている。この地図は、現在の地形図と比べても遜色がない。改めて島原藩の文化の高さがわかるのである。

（奥村立助は切米一一石扶持二人。中小姓列取立られ、持高七石勤方、藩校算師。藩主へ測量について講義している。天保三辰一二月中小姓格。同七申六月中小姓本席勤。弘化三年三月大納戸次席。嘉永三年四月大納戸本席勤方となり、安政五年正月病死する。）

八、終わりに

伊能忠敬の全国測量二百年記念行事をきっかけに、地元島原と伊能の関わりについて調べてみた。

島原に来たときは六六歳であり、歯痛で悩まされ、体力も弱っていたようだ。それにも関わらず全国測量という大仕事をやり遂げ、「大日本沿海実測全図」を製作したそのエネルギーの基は何であつたろうか。伊能忠敬の知的好奇心と実証的な精神には敬服するばかりで、せめてその万分の一でもあつたらと、思うのである。生涯教育が叫ばれている今日、私たちの生き方に何かサジエスジョンを与えてくれると思う。「人生、楽しみは後半にあり」だ。

島原藩は伊能を迎えた後、本格的な領内地図作りに努めた。若手の奥村立助を同行させて測量術を学ばせ、終了後は江戸に上らせて挨拶に出している。また、伊能図が公開される三年前には領内図などを入手して、早速それをもとにした領内図を作った。これらの図を研究土台として、各村や領内図の作成に取り掛かり、伊能の来島一五年後には今も遜色がない地図を立てた。この村図は藩政終了後に各村役場へ引き継がれて、明治初年の村政に大きく役立つた。

伊能の島原領内測量は、寛政の大地変の二〇年後で、島原城下町が

全滅し、島原の地形が大きく変わったときであった。城下町には四日間も滞在して、町内だけでなく新しく生まれた三九もの島々を詳しく測量している。また、大崩壊した眉山や噴火した普賢岳を描いていて、現在の防災研究・治世にも役立っている。改めてその業績のすばらしさを再認識するものである。

(まつお たくじ・島原城資料館)

▲主要参考文献▼

小島一仁著 「伊能忠敬」三省堂

伊能忠敬研究会編 「忠敬と伊能図」アワプランニング

佐久間達夫著 「伊能忠敬測量日記」

佐久間達夫著 「伊能忠敬江戸在住日記」伊能忠敬研究会誌

柳原郷土史料館蔵 「文化六年豊州御領測量方取斗一件」

柳原郷上史料館蔵 「九州地図入手費用明細」

長崎県立図書館蔵 「測量師通路記録」

島原図書館蔵 「島原領内地図」「三会村図」等



「島原大変」の様子生々しく

噴火絵図4点長野で発見

国立歴史民俗博物館で展示へ

朝日新聞 2003.6.28

伊能の地図 ぼろぼろ

『日本の技術で補修を』 東京新聞 6/12

一九九五年にフランス中部の村の民家で発見された伊能忠敬作成の日本地図が、ひび割れや退色などでひどく破損していることが十日までに、伊能忠敬研究会の渡辺一郎代表理事の調査で分かった。

渡辺理事は「発見時には非常に保存状態が良かつたが、五月に訪仏して惨状にがくぜんとした。個人所蔵では温度、湿度管理などに限界がある。重文級の資料なので日本の技術で補修し、美術館・博物館など公的機関で保存してほしいと日仏両国に呼び掛けている。

地図は和紙に描かれ、中図と呼ばれる縮尺で、北海道から九州までの全八枚がそろっている。伊能の没後、一八二一年に幕府に提出された地図（焼夫）と同じ手法で作られ、国内では全部そろつたものは東京国立博物館にあり、国の重要文化財に指定されている。

地図は美しく彩色され、天体観測の地点などが細かく書き込まれており、完成度が高い。幕末にフランス人が持ち帰ったと推定される。



伊能忠誨日記 (一一)

佐久間 達夫

文政三年

七月 小

八日 紙屋新兵衛(注2)来る。又、内義来る。

九日 上弦巳九刻。高橋侯来鶴。

一〇日 セオ(注3) (松田)、西の丸へ行く。

一三日 予、箱田、源空寺へ行く。

一八日 伯母、足立長雋(注4)へ行く。

二三日 伯母、紙屋へ行く。

二五日 二百十日。晴天。

二六日 伯母、紙屋へ行く。曾我野(村)の小河原喜七(注5)来る。

二七日 伯母、足立長雋へ行く。

二九日 白露。巳二刻、渡辺啓次郎来る。上野の上総屋甚左衛門の後家(注6)來り泊る。

九月 大

二日 寺沢善藏来る。

三日 予、信太権右衛門と日黒へ行く。

四日 足立長雋来る。

一〇日 紙屋彦次郎。今日より読書毎日来る。

一一日 甲子。紙屋の内義来る。伯母とセオ、足立長雋へ行く。

一二日 坂部の妹来る、泊る。天満屋佐兵衛来る。

一三日 土用事。子六刻。予、伯母源空寺及び高橋侯へ行く。八ツ時

一四日 後、坂部妹ナミ(注10)帰る。セオ目見えに行く。

石渡鐘太郎、今日より読書毎日来る。

八月 大

朔日 甲申。三宅(注7)来る。甚左衛門の後家帰る。

二日 松田丈右衛門の母、娘来る。セオ、祖母の泊り宿へ行く、泊る。

四日 三宅来る。柳屋啓兵衛来る。予、諸礼稽古初め。松田丈右衛門の母娘来る。信太権右衛門(注8)来る。

五日 桑原隆朝来る。予、松田のセオ、三宅へ行く。

六日 セオ、祖母の宿へ行く。セオ、祖母来る。セオ泊る。

九日 上弦。夜子一刻。渡辺啓次郎来る。

一一日 伯母、高橋侯へ行く。

一三日 山本啓助来る。

一四日 紙屋新兵衛来る。安井玄茂来る。

一五日 秋分。未九刻。山本啓助来る。伯母と予と紙屋へ行く。セオ、紙屋へ行く。今夜五ツ時前に満月へ木星入る。又出る。

一六日 望申四刻。大坂町博屋の女房来る。

一八日 渡辺兵左衛門来る。

二一日 山本啓助来る。伯母、白木屋の倉へ行く。

二三日 下弦、午五刻。九ツ半時後廻状来る。

二四日 永沢仁兵衛(注9)来る。

二五日 予、三宅へ行く。

二七日 伯母、桑原及び白木屋へ行く。

三〇日 寒露。戌五刻。予、三宅へ行く。

一一日 伯母、桑原及び白木屋へ行く。

一二日 伯母、桑原及び白木屋へ行く。

一三日 伯母、桑原及び白木屋へ行く。

- 一五日 退望。丑一刻、予、三宅へ行く。李齋来る。伯母、紙屋へ行く。
- 一六日 霜降。丑一刻、上野の上総屋のカツ来る。
- 一七日 足立長篤来る。紙屋内義来る。
- 一〇日 松田セオ、長篤来る。
- 一一日 伊能七左衛門（注11）来る。松田セオ半元服す。
- 一二日 退下弦。寅六刻。樽屋女房来る。セオ紙屋へ行く。久保木順藏（注12）病氣来る。泊り居る。
- 一三日 セオ引き越し支度大取込み。樽屋の女房来る。予、足立長篤へ行く。伊八来る。紙屋の内義来る。松田のセオ屋敷へ引越す。山本来る。
- 一五日 山本来る。桑原の弟子来る。桑原隆朝来る。足立長篤来る。
- 一九日 伊能七左衛門来る。
- 三〇日 足立長篤来る。廻状来る。岩瀬柳助方より至来。即刻、石渡鐘太郎方へ順達。
- 十月 大
- 朔日 甲申。立冬。卯七刻。山本啓助来る。李齋来る。信田権右衛門来る。伯母、高橋侯へ行く。高橋侯普請成就引越し也。桑原隆朝来る。
- 二日 篠原（村）の久保木政吉（注12）来る。
- 三日 桑原隆朝來鶴。
- 四日 玄猪。大野弥三郎来る。伊能七左衛門来る。紙屋新兵衛来る。
- 五日 信太権右衛門来る。
- 七日 伊能七左衛門来る。紙屋新兵衛来る。
- 八日 上弦。酉九刻。久保木順藏兄政吉と帰国す。
- 九日 信田と予、加茂の季鷹へ行く。此時季鷹地蔵橋吉田に泊り居る。伯母と予と信田と反町の新道へ行く。
- 一〇日 保木と予、佐藤（注13）へ行く。先祖四十三代の実名を持参し行く。先生るす。千鶴（村）のイク来る。泊り居す。
- 一一日 保木、佐藤へ行く。予の実名を林侯（注14）へ御願いを、先生に願い、先祖の実名をあげる。
- 一三日 予と伯母、源空寺へ行く。
- 一四日 足立長篤来る。
- 一五日 望。午六刻。山本来る。
- 一七日 佐原より鮎来る。足立左内へ一本、佐藤へ一本進上す。高橋侯御持服二枚、黄金一枚拌領。御恐悦。予、高橋侯へ行き受け、御酒等頂戴。夜の六ツ半時後帰る。
- 一八日 先日、佐藤先生（李齋）へ願い故、佐藤より林侯（大学頭）へ願い上、予の実名忠誨（ただのり）、忠礼（ただのり）、忠器（ただかた）。此の三つの内、好次第願い上げべしと。佐藤先生より予へ御渡し。箱田、保木、高橋侯御恐悦へ行く。
- 一九日 予、高橋侯へ行く。下河辺（注15）と予と高橋侯に実名の撰を願いし。忠誨（注16）を撰出しけり。
- 二〇日 予と保木と佐藤へ行く。実名の義、忠誨に仕度と申す。且又、祭酒、侯へ入門の義相談せしに、入門は別に仕そらえと先生申す。十五歳以下の人は入門は出来ぬよし也。信太権右衛門と、同平吉来る。
- 二二日 退下弦。子六刻。三宅八郎左衛門夫婦来る。
- 二三日 予、佐藤へ会え行きしに、先生林侯考えの実名を下されしかば、予、出直し上るまでは、御預り下さるよう由。又、上下にて佐藤へ行く。林家のお元関（玄関）へ行き、御用人に対

面し、佐藤へ帰り、実名を頂戴し帰る。

二四日 予、高橋侯へ行く。

二五日 伯母、高橋侯へ行く。

二六日 足立長篠来る。

二七日 信太権右衛門来る。御藏前掛り大野辰之助見廻りに来る。伯母桑原へ行く。

三〇日 予、三宅へ行く。

十一月 小

朔日 甲寅。大雪。申九刻。予、佐藤先生へ書判を願い、直に考え貰い帰る。

二日 紙屋新兵衛来る。同人の妹タカ来る。

三日 紙屋新兵衛の妹タカ来る。井上治衛門へ縫二疋詫え遣す。伯母紙屋へ行く。

五日 略曆、浅草より来る。

六日 内田弥治馬来る。紙屋新五郎大病の由聞く。伯母紙屋へ行く。

九日 伯母（忠敬の二女嫁、天明八年没）の三十三年忌也。足立左内（注17）、予に聖堂の吟味に出そうちと申す。信太権右衛門来る。

一〇日 焰燧開く
信太権右衛門来る。同人立ち振舞す。

一二日 予、源空寺へ行く。予、日本橋の須原屋へ行く。杉田立敬へ

橙を取りに遣す。浜町山伏戸なり。

一三日 保木、佐藤へ行く。予の聖堂の吟味の義を先生へ申上る様申す。

一四日 退望。子九刻。信太権右衛門来る。同人帰国。今暁寅の時前

より夜明の卯時迄星測る。予、高橋侯へ行く。予の聖堂の吟味に出る事成る間敷由、高橋先生申さる也。

一五日 今暁寅の時前より卯時後迄星測る。

一六日 冬至。亥六刻。朝雪降る。五時後薄曇、七時後大曇、六時前

より晴る。

一九日 高橋侯入来る。此間、佐原の手紙に小作米を出さぬ由、申越した故、伯母心痛し思う様は、予に祖父の跡を相続させんと。

此意を先生に如何と申上る。且、先生曰く、此言を加納屋に言わずに、後の事を加納屋に相談すべしと仰らる。後のこととは、家の後々の事也。且又、予に星図を認めろと仰らる也。

二〇日 箱田左太夫、長谷川十兵衛へ行く。

二一日 予、祖父（忠敬）の跡を相続、又は父の跡を相続心不_レ定。先祖の前に御くじを取る。佐原住居、父の跡を相続するのくじ出る也。故に伯母、加納屋を不_レ召也。

一二日 下弦、亥五刻。内田弥次馬来る。

一三日 予、佐藤と浅草の足立左内へ行く。坂部のナミ来る。重太郎、予、星図の事は、先ず古の実測をしらべ、後に実測にもれし星は、ラランデ推歩を用ゆと言う故に、此より高橋侯の御役所へなるたけ日々に来れと云う。

一四日 予、星図の事は、先ず古の実測をしらべ、後に実測にもれし星は、ラランデ推歩を用ゆと言う故に、此より高橋侯の御役所へなるたけ日々に来れと云う。

一五日 弟（鉄之助、文政元年没）の三年忌也。佐藤の弟子順助帰りし由聞く。

一六日 予、浅草高橋侯御役所へ行く。又、予佐藤へ行く。句釈（講釈）日也。

一七日 雪降る。伊能七左衛門来る。

十二月 大

恒星推稿(三)、一冊不出来故、内にて推す。

二日 渡辺啓次郎来る。

二四日

紙屋内義来る。

三日 予、佐藤へ寒気見舞へ行く。直に林講を聞く。

二六日

画師北双来り、予の朱肉をねる。今朝七ツ時より「ススハキ」。上野の上總屋の後家来る。

四日 予、渋川へ寒気見舞へ行く。又、三宅へ行く。今日、予、渋川より七曜曆を借りる。

二八日

予、高橋、足立、源空寺、佐藤へ歳暮に行く。今度帰り少し風氣。

八日 渋川入来。紙屋の内義来る。

二九日

予の石印(刻印)でき、川口勝次郎へくす。今夕早くねる。

九日 文政元戊寅年五月上旬より、予、暦学稽古し、今日迄に下編(暦象考成)の日躔に月離、月日食、土木火金水星、及び後編の日躔、月離、月日食、推歩を終る。予、御役所へ行き、直に又足立の宅へ行く。

三〇日

予、不入湯。髪を結びすらず。今日一日床に居る。予、印形出来る。

一〇日 桑原隆朝入来。工藤修庵(注18)来る。大野弥三郎来る。

二九日

文政四年 伊能忠誨 一六歳

一一日 雪降る。夜より降り、今朝は五寸五分余積る。昼後晴天。余、

正月 小

一二日 大野弥三郎来る。桑原の娘フサ来る。紙屋内義来る。

朔日

予、病氣平癒。年始不出。煙草再始。

一三四日 予、御役所へ行く。紙屋新五郎来る。戌時地震。紙屋内義来る。

二日

予、末出年始。予読初め、算初め。

一五六日 卯時後地震。夜、持田勝助(注19)算術稽古に来る。

三日

桑原隆朝来る。予髪月代をする。

一七日 雪降る。予、御役所へ行く。

四日

予、病氣平癒。年始不出。煙草再始。

一九日 予、御役所へ行く。伯母、高橋侯へ行く。

五日

予、末出年始。予読初め、算初め。

二〇日 石渡鐘太郎、紙屋彦次郎両人の稽古今日迄也。八ツ時前廻状来る。

六日

予、高橋侯、足立、源空寺、下役等へ年礼。又、近所、佐藤、

二一日 渡辺啓次郎来る。八半時後、予、深川の白木(屋)の倉へ行く。

七日

予、三宅、渋川、門谷(注20)、渡辺へ年礼。又、鉄砲津の稻

二二日 三宅来る。藤田七夜の由。予、御役所及び、足立へ行く。九

八日

予、高橋侯へ行く。伯母、重太郎に「明日来れ」と云う。

二三日 予、御役所へ恒星推稿(三)を持参し、又、帰りに持ち帰る。

九日

今朝、重太郎帰る。重太郎、予に「明後日来れ」と云う。所々

二三日 年始状を書く。

一〇日 七時前より夜の四時前迄品川火事。大野弥三郎来る。

一日 予、足立へ行く。稽古初め。例年は十九日也。今夜雨天。高橋侯来駕。桑原隆朝入来。紙屋夫婦年始に来る。

一二日 大野弥三郎来る。伯母、藤田、及び紙屋へ年始に行く。

一三日 予、源空寺へ行く。対照書札一冊借り来る。但し重太郎に借りる。保木長来り泊り居る。

一四日 持田勝三郎（注19）来る。稽古初め。大川治兵衛来る。紙屋新兵衛来る。伯母紙屋へ行く。

一五日 大野弥三郎来る。

一六日 大川治兵衛来る。今夜大風。予、佐藤へ行く。今日初会。

一七日 予、御役所へ行く。

一八日 保木、予、神田津田（注22）の屋敷（佐原村領主）へ年始に行く。久保木俊藏来る。大風、火事芝（しば）にあり。

一九日 予、林家（大学頭）へ年賀に行く。此所火事度々あり。

二〇日 今夜より予恒星測量す。予、渋川侯へ火事見舞に行く。又、門谷へも見舞に行く。予三宅へ行く。稽古初め也。例年二十一

五日の由。天満屋長兵衛来る。丑時後より南新堀火事。見舞に来る人、北双、英湖、吉川、下川辺、川口、桑原親子三人、渡辺啓次郎、伊八、駆付け人足四人。

二一日 桑原隆朝入来。紙屋新兵衛来る。

二二日 予、御役所へ行く。足立左内へ行き、琴星十九日の夜より初めて見由聞く。加納屋、久保木俊藏、大師河原へ行く。

二四日 伯母、保木長を連れ、高橋侯へ行く。予御役所へ行く。大野弥三郎来る。神保庄作（注23）来る。長ワビスミ高橋侯に居る。

二五日 予御役所へ行く。加納屋、高橋侯へ行く。

二七日 予、久保木俊藏、加納屋、人形芝居へ行く。井上治右衛門來りし由。

二八日 予、御役所へ行く。

二九日 紙屋内義来る。大野弥三郎来る。桑原隆朝来る。

二月 大

朔日 八時後日食。予、觀星鏡にて測る。紙屋新兵衛来る。桑原隆朝娘来る。

二日 紙屋内義来る。大野弥三郎来る。桑原隆朝来る。

三日 予、御役所へ行く。

四日 予、御役所へ行く。

五日 予、三宅へ行く。伊能七左衛門来る。

六日 予、佐藤へ行く。

七日 予、御役所へ行く。

八日 今夜、予、伯母、紙屋へ行く。紙屋より薬師へ行く。

九日 高橋侯入来。大野弥三郎来る。紙屋内義来る。持田勝三郎母来る。

一〇日 予、御役所へ行く。大野弥三郎来りし由。伯母、高橋侯へ行く。伊能七左衛門来る。明日帰国と云う。

一一日 地主隱居来る。叔母、紙屋へ行く。

一二日 予、御役所へ行く。伯母、高橋侯へ行き、高橋侯、馬場（注24）等と向島辺へ行く。

一三日 予御役所へ行く。伯母高橋侯へ行く。予、伯母源空寺へ行く。但し、馬場へ寄る。渡辺啓次郎来る。

一四日 桑原奥方、息子、娘来る。

一五日 予、御役所へ行く。伯母、紙屋へ行く。渡辺啓次郎来る。

一六日 伯母、紙屋へ行く。紙屋新兵衛来る。

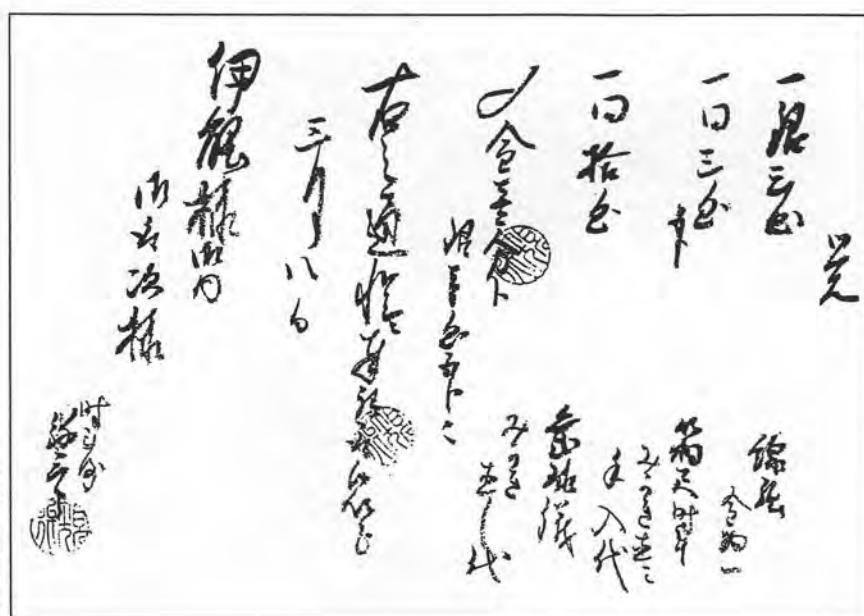


- 一七日 予、御役所へ行く。
- 一八日 予、御役所へ行く。渋川侯へ祖父の作書の目録を上る。
- 一九日 昨日、市野金助、二ノ丸火の番被付仰候由、門谷より聞く。但し、高六十俵の由。
- 二十日 予、御役所へ行く。
- 二一日 予、市野へ行く。此頃、風邪流行る。^{はや}
- 二二日 予、御役所へ行く。
- 二三日 予、佐藤へ行く。先生始め弟子等風邪。林講なし。
- 二四日 予、御役所へ行く。足立重太郎へ遠鏡の玉四枚譲る。渡辺啓次郎来る。大坂へ行く由。黄楊の長そろばんを譲る。
- 二五日 予、御役所へ行く。予帰りて風邪ふす。
- 二六日 持田勝三郎見舞に来る。
- 二七日 山本来る。
- 二八日 山本来る。
- 二九日 山本来る。安岡玄修来る。桑原奥方来る。持田勝三郎、桑原隆朝来る。
- 三〇日 予全快。山本来る。紙屋内義来る。持田勝三郎見舞に来る。

(つづく)

注
釈

注1 大野弥三郎より伊能様への測量器具修理代の覚(領収書)



注 2 紙屋新兵衛

紙屋新兵衛は、江戸亀島町に住んでいて、新兵衛の妹タカ、妻の姉チセ、新兵衛の子・新五郎、美次郎、彦次郎など、家族ぐるみで伊能家の江戸宅と交際していた。忠誨の母方の親族か。

注 3 松田セオ

松田丈右衛門光遠・琴の娘か（光遠37才、琴32才）。九月二一日付に半元服（略式の元服。女子は眉をそらず、鉄燐「お歯黒」をつけず、ただ髪を丸髷に結った）をあげた。

注 4 足立長萬（一七七五～一八三六）

井上正広の子で、安永四年生まれ。名は世茂、号は無涯。薩摩藩医学を学び、和蘭産科書を講究して西洋産科医となる。天保七年十二月、六二歳で没。

（『日本人名辞典』平凡社）参照

注 5 小河原喜七

忠敬の莫逆の友、飯高尚寛惣兵衛の娘タミの嫁ぎ先で、小河原家は、曾我野村（現千葉市蘇我町）で廻船問屋をやっていた。

注 6 上総屋甚左衛門の後妻カツ

江戸上野町の人。忠誨日記に甚左衛門の妻のことを「伯母」と記してあるので、忠誨の母方のおばになる。なお、甚左衛門は文政三年六月二八日に死亡しているので後家と表記してある。

注 7 三宅八郎左衛門

忠誨が「祖父（忠敬）の画像を三宅へ表具を依頼しに行つた」と、記してある。

注 8 信太権右衛門

下総国南中村（現多古町南中）の平山藤右衛門季孝の二男で平山宗平といつた。第一次、二次測量に参加し、後、銚子（現銚子市）の信太氏の養子になり、文政五年十月に病没した。

注 9 永沢仁兵衛

永沢次郎右衛門景寿（伊能三郎右衛門景知の三子）の子・軌景が、佐原村上仲町（現三菱館敷地）に分家し、仁兵衛と称した。

注 10 坂部ナミ

全国測量で、支隊長として忠敬を補佐した坂部貞兵衛の娘か。

注 11 伊能七左衛門

伊能三郎右衛門家の親族で、伊能家六代景利の娘リヨが、伊能七左衛門清茂に嫁ぐ。又、忠敬の妻ミチの先夫が、伊能清茂の二男景茂である。なお、伊能家十四代景德（端美）は、伊能七左衛門成徳の二男で、十三代景文の娘コウの婿養子となる。

注 12 久保木政吉、順藏

篠原村（現佐原市篠原）の人である。順藏は政吉の弟。

注 13 佐藤一斎

名を坦といい、昌平齋の儒者であった。伊能家と大学頭との仲介役となる。

注 14 林侯（林大学頭）

林家は、初代信勝（字は子信、号羅山）が徳川家康、秀忠、家光、家綱に書を講じたので、代々大学頭となる。二代春勝（がほう）、三代

信篤（鳳岡）、四代信充（福岡）五代信言（鳳谷）六代信徴（鳳潭）、

七代信敬（錦峰）、八代乗衡（述斎）、九代號（裡宇）、十代健、十一

代麿、十二代昇と。伊能忠敬は、五代信言（鳳谷）に形式的に入門

し、名付け親になつて貰う。

（『国書人名辞典』岩波書店）参照

注15 下河辺与力

通称を政五郎といい、高橋景保の手付下役として、第五次、六次、七次、十次の測量に参加し、地図作成に携わる。シーボルト事件で中追放。

注16 忠誨の命名

文政三年十月十八日に、林大学頭より佐藤一斉を通して、忠誨、忠礼、忠器の三つの名がしめされた。忠誨は、高橋景保に撰者をお願いし、忠誨と決定する。

注17 足立左内

明和六年大阪の医師北谷琳筑の子として生まれ、足立家の養子になる。諱は信頭、字は子秀、号は渓隣といった。高橋景保の手付下役。高橋景保の曆作、及び測量御用手伝いをし、天保六年に六七歳で天文方となる。弘化二年没。

（『近世日本天文学史』恒星社恒星閣）参照

注18 工藤周庵（修庵）

桑原隆朝如則の二男。名は静卿、通称を周庵といいう。工藤鞏卿の養子になる。仙台藩医。文政八年八月二十七日に、佐原の伊能家に兄養純（如弘）と来る。

注19 持田勝助、勝三郎

忠誨宅で、算術の稽古をする。

注20 門谷清次郎

名は常久、通称清次郎。第五・八・九・十次測量に参加。高橋景保の手付下役。シーボルト事件に連座して、天保元年三月に江戸十里四方追放となる。

注21 吉川景武

名は景武、通称克藏。御書物同心にて高橋景保の手付下役。シーボルト事件で、門谷清次郎同様江戸十里四方追放となる。

注22 津田日向守信富

津田氏は佐原村を采地としていた。安永六年に、旗本津田日向守信之が佐原村を知行し、その子山城守信久、そして日向守信富（壮之介）が支配した。

注23 神保庄作

伊能忠敬の父・神保貞恒の長男貞詮の二男、幼名を庄作、諱を延宣といった。

注24 馬場佐十郎

名は貞由、元姓は三栖谷氏。馬場為八郎の養子となる。志筑忠雄に和蘭語を学び、和蘭語に關した著書や抄訳がある。文政五年四月、英船サラセン号が浦賀に来航したとき、足立と同地に出張し応接にあつた。文政五年七月二七日、三六歳で病没。

岩城島の伊能測量文書 その三

伊藤栄子

続・尾道町文藏の赤穂での伊能測量調査報告

御船仕構之事

一、拾六丁立御小早 壱艘

赤穂様御印御幕打ニ而御座候 尤御分見被遊候節、此船江被召
候義ニハ無御座候但 自然遠方之島亦は御途中雨天御中食御認メ被遊候節、御乗
組被遊當小船ニ而御運び被遊候御様子見聞仕候

小早は足の速い船。連絡とか移動用に伴つていた。

一、浦船五拾石位 三艘

但 御荷物積

内 壱艘 御用長持壹棹、御用測量御道具積

但シ此船同心衆御両人、村役人式人乗組御前宿より御泊所迄、
持送り候趣ニ御座候

式艘 外御荷物積送り

右同断

但シ此分村役人式人宛

右同断

御用長持ちと、測量道具運搬用に五〇石船が三艘用意された。御用長持ちは
格式が上で、同心が警備についた。このとき、そうなつていただかうかは不明
であるが、第八次測量では、長持ちは隊員の旅費が納められていた。

一、浦船式拾四艘

但 式拾四五石位積候様小船ニ而御座候 壱艘水主三人乗り

内 式艘 伊能様 高橋様 御召船

但 此分御用のぼり相建候様見聞仕候 置火燧、御刀掛け、毛
氈、御たばこ盆等入申趣ニ御座候

式艘

但 御茶道具類積、給仕人式人宛仕構方式人相添、御召船脇ニ
付添罷越候 いずれも榜着一、式拾艘 朝七ツ時分より船毎江赤穂様御紋付御焼（ママ）灯壹張
ヅ、燈用懸り之役人并ニ夫之者船端へ相詰メ、御二手三手之御差
図ニまかせ、前後夫々へ乗組居候趣見聞仕候但 此式拾艘之内、御先方御役人様方并ニ赤穂より御出張之御
役人様方、其外村役人、御案内付添役人、人夫等乗組御供
仕申候

右二拾四艘船江御紋付御焼（ママ）灯並ニ御印建居申候

伊能、高橋には、船一艘づつあてられ、御用のぼりを建て、置火燧、刀掛け、
毛氈、たばこ盆等を用意した。さらに、お茶船式艘を随伴させ、茶道具類を積
み、給仕人式人と指図人式人が同乗し、御召船脇に付添つた。至れり尽くせり
である。焼の字は當て字のつもりで書いたらしいが、チヨウとは読まないヨウ
と読む、誤字である。

- 一、伊能様御格式 御歩行目附格
高橋様御格式 御小人目附格
右坂越浦二而承合候處、片上三而承合候通ニ御座候
- 一、伊能様、高橋様ハ一日替り御勤、御非番御方様は朝四ツ時ニハ御泊所江御着被遊、夜分測量之御拵被遊候由、此義ハ時ニ取候義と相聞申候
- 伊能と高橋は一日おきに出勤し、非番の者は、天測場に直行して準備にあたつたという。この記事は初めてお目にかかる内容である。すべての場所でそういうことはありえないが、こういうこと也有つたのであろうか。
- 一、赤穂御城下より 御目附 神田式右衛門様御供
但 御國方ニ而は御徒目附様と相聞申候
御組衆と申ハ同心衆と相唱候由承申候
一、同 御船手方 善 覚左衛門様
水主衆三人
但御國方ニ而は御船頭様と相聞申候
一、同 御郡方、御下代衆
岡島嘉十郎様
軸原富次様
一、寺老ヶ所 何宗除地 何寺
一、同老ヶ所 御年貢地 本寺京都何寺末寺
一、修驗
- 赤穂藩派遣の藩士たちである。実際より格を一つ持ち上げて挨拶に出たことがわかる。
- 一、御郡方より被仰出候由 大庄屋坂越浦 湯浅四郎左衛門
相生村庄屋 尾崎村庄屋 佐右衛門
右御領分御付廻り相勤申候 かりや年寄 源四郎
右赤穂一郡限り為浦役人総代、御付廻り相勤メ申候
森和泉守殿領分 播州赤穂郡
但本高を書上候由
一、高 但本高を書上候由
一、塩浜何軒
但當時軒数ヲ書上申候由
一、村長サ 東西 何拾何丁 何村境より
一、家数 但御領見様書上候通ニ書上申候也
一、人別 但右同断 尤坂越浦二而ハ御不用ニ御座候由ニ而、人別書出不申候由承り申候
一、社 壱ヶ所 何之宮 除地
但此除地之儀ハ御國方ニ而引高之儀ニ相当り申候由
高付之場所寺社之類出来候分引高ニ相成、村間屋ニ相成候
分除高と相唱申候由事申（ママ）候
本寺京都何寺末寺
一、寺老ヶ所 何宗除地 何寺
一、同老ヶ所 御年貢地 本寺京都何寺末寺
一、修驗

人じん

やきくり

御飯 焼物 御湯 センジ茶 香之物

右之通村高、長サ、家数、寺院、社共書面之通相違無御座候 以上

年号月日

庄屋

御當て

右書上美濃紙細字ニ相調候事 但御道筋村毎入用ニ御座候

御途中 御昼

鰯 うお 平 鯛 汁 きしめじ 茶碗 えび

大こん 輪柚 磯かき

青み ツみ入 牛房

かうのもの 青苔衣かけ

森和泉守殿領分
播州赤穂郡坂越浦

大庄屋

奉書紙三而 湯浅四郎左衛門

同廿六日 夕 坂越浦分御献立

生盛 せん玉子

きす糸作り 汁 岩茸 平皿

しらが大こん かぶら 妻かさね

紅(カ)のり ちさ 長いも

くりせうが しゐ茸

御飯 焼もの めばる 香の物 御湯

燒物 大こん 御茶

御飯 焼もの めばる 香の物 御湯

燒物 大こん 御茶

同所 御夜食

一、餅菓子 御煮

花えび 甘酒用意

さとも にんじん

くわい にんじん

れんこん

同廿六日 同宿 朝

平 魚切身 汁

オノ目豆腐 ちよく

からせあへ (からしあえカ)

くわい

同廿七日 同所 朝

平 よせどうふ 汁 丸切長いも ちよく
あんかけ 小しるたけ

魚才切
紅くらげ

大根
きんかん

さがらぶ
塩鮑諸島・本島

茶碗 大こん 香の物 御湯 御茶

ふろふき

同所 御飯
鯖魚 汁 つみ入 平皿 くわい
大こん しめじ 生うお 御飯

青み つくりも
くり
にんじん

焼きもの 大かまぼこ 香のもの
あた(ママ)け

御湯 御茶
香の物用意
なすいつけ あさづけ 奈良づけ
かぶとふかけ たくあんづけ

右尾道町筆役分蔵義ハ片上駅より直ニ罷帰り候ニ付、同所より下浦島々之様子并ニ天文方御役人様御近寄被遊候ハゞ、早速順達致候等候様相頼置可然段申談相別候ニ付、同人聞書之趣町方へ差上申候 写如

此御座候



一、天文方御役人様當御領分江御移り之頃合、赤穂坂越浦より當郡迄之凡里程考合ヲ以大庄屋湯浅四郎左衛門其外近村々より罷出居候役人共へ承合申候處、浦辺島方測量之義、西之宮初メ而之儀ニ而、播州島海辺は灘之儀故島々も無之、絵島之義も廻り三里と申候得共、室津より往来五日懸りニ而ハ殊之外隙(ヒマ)取、尤絵島廻り三里之外小島々多夫等悉測量被遊候ニ付、日数も込候得共何分推察ニ而は浦辺島々初メ而之義故、播州ニ御念入候事歟追々御量被遊候而御手ニ入候ハゞ御手分も出来、大体は御見廻りニ而相済候杯と申様ニ相成候ハゞ御日取も縮り可申候得共、是迄之御様子ニ而ハ廣島迄之内御迎年被遊候様必相成可申候、備後國へ御移之義ハ御廻り方ニ寄り可申候得共、当霜月下旬ニ被相考候 何れも推察之趣申聞候義ニ御座候ニ付、御堅(ママ)考之端ニも相成可申哉とは又申上候

左は天文方御役人様測量為御用御下り之趣ニ付、上筋承り合候趣奉

察上候

丑十一月

以上

向島西村庄屋 理兵衛
後地村組頭 武兵衛

覺

書付

一、天文方御役人様方測量為御用此度山陽道海路島々御量、追々御下向之趣ニ付右外聞為御用、向島西村庄屋理兵衛、後地村組頭武兵衛兩人へ被仰付、先月廿一日當所出立備前岡山へ向ひ罷越候 同所ニ而承り合候趣と神辺駅庄屋廣右衛門順達書計写し仕、先達而御注進奉申上候通御座候、夫より片上駅へ罷越同所名主門兵衛江応対仕、同人播州飾万御泊り所江罷出様子御窺ひ申上、絵図等調方都而仕構方申聞候ニ付、委細ニ書写し夫より御順行先赤穂領坂越村御泊り之

由相聞申候故、去ル廿六日片上出立坂越浦罷越候 大庄屋湯浅四郎
左衛門ヲ以應対之儀申込候處、平山郡藏様と申御方御達被成候も、
私共より申上候は測量就御用御順國被遊候段御苦勞奉存候 廣島領
江無程御移り披遊と奉恐察候處、浦辺島々之義ハ別而辺鄙ニ御座候
故、物每不都束と可有御座と恐入候義奉存、右ニ付此度罷出御用向
御窺ひ申上候間、御順行筋心得ニ相成候義、猶亦仕構方何々御好も
被為在候ハゞ、被為仰付被下候様仕度段取合セ挨拶申上候處、當所
より其御國村方迄里程何程有之哉御尋披遊、凡三十弐里可有御座と
申上候 遠路罷出候儀と念入候義など御挨拶被仰聞、浦しま絵図面
之義先達而順達之趣ニテ承知も可有之念入相調、先達而前宿迄差出
候并ニ宜案内申出候様、當御領分江御移り之上御他領島方ニ而も順
路宜候得ば入まぜり分見測量被遊候迄、其御先々申通置候様被仰聞
候 順路筋之義とハいづれ前宿江絵図持參候上申談、相究可申由ニ
而差而格別之儀も不被仰聞、翌廿七日ニは雨天ニテ測量相成不申候
由ニ而、御逗留ニ相成候ニ付私共義も逗留仕、廿八日未明より御立
道々島々測量被仰候ニ付、委細見聞之趣等別紙帳面ニして差上申候
猶亦村々絵図面之義東西之義方角丁間等別而委細御好被遊候由ニ
御座候ニ付、當郡浦辺島々丁間下打仕絵図面等相調置可然と奉存候
則為御見合片上駅ニ而写取申候絵図壹枚相添此段御注進奉申上
候 以上

丑 十一月三日 割庄屋郡元 武十郎
御調郡 向西村庄屋 理兵衛
御役所 後地村組頭 武兵衛

前泊の宿舎へ持參する絵図面が難しいという。村で描いてもなかなか気に入
つてもられないが、片上村の図面は上首尾だったとのこと。聞いてみると、磁

公儀天文方御役人衆中様御順行ニ付、為聞合せ岡山江罷越候處、郡方
より高島西村庄屋理兵衛、後地村組頭武兵衛兩人罷越候ニ付、何角申
合岡山御本陣田原屋与右衛門方ニ而様子相尋候處、於岡山は未何之御
手当も無御座候趣相聞申候 尤先達神力庭（カ）右衛門より聞合之人
与右衛門方へ罷越候 上筋之趣聞取写し取罷帰候故、定而承知可有之
其外相替義無之趣との義ニ御座候 右写し書ハ神辺罷通候節立寄一応
披見仕候ニ付、尾道江相廻候義と存写取不申候 右聞書廉々ヲ以、岡
山より高砂へ外聞ニ罷越候 桜や九右衛門と申仁ニ逢ひ様子聞合候處、
室津絵島迄方角御順行と之趣ニ付、片上へ罷越名主門兵衛方ニ而承合
候處、同人義飾万津姫路御泊り所江罷越、何角及見聞候趣書記居申候
ニ付、写取并片上村仕構之廉々等頭書別紙之通ニ御座候

一、絵図面至而六ヶ鋪様子ニ相聞申候 所々より差出候絵図面は都而
平地より見込、或は横より見立ニ而恰好能様ニ相調差出候所、段々先
方より御好等も有之、調替候様成義も相見候由、尤片上より差上申候
絵図面は殊之外御氣ニ入御好も無之様ニ付、絵図面之仕様相尋候所、所々
ニテ磁石ヲ以方角ヲ第一と仕、山と里、見分路すじ形チニ相調申候義
ニ御座候 夫故絵図師相頼写取帰申候

一、廿六日播州坂越へ御移り之趣ニ付、理兵衛、武兵衛兩人彼地へ罷
越申候ニ付、御乗船并ニ測量御業前御止宿所之様子ハ兩人及見聞罷帰
可申と奉存候

一、私義片上より倉舗（ママ）、玉しま、笠岡、福山通罷帰候 浦々島々

之様子相尋候所、荒増左之通ニ御座候 備前御領福浦より、つら島迄

海上凡二十里余、浦数三十余浦有之由候

石を立て、方位をあわせて仕立てたという。それではと、絵図師に頼んで写し作つて貰つて持ち帰る。

そして、一番知りたい尾道がいつになるか、聞いても誰もわからないので、海岸の里程、測りそうな島々の距離、島廻り里程などの情報を集めている。すばらしい積極的な情報活動である。

備前国島々

児島廻凡四十里

かつら島廻五六丁

能地島廻凡五六丁

松島廻五六丁

むくし廻毫里程

鎌しま廻十丁計

大島廻十武三丁

上下水島廻毫里余

公義御直構讀岐国

塩飽七浦

廣しま 手島 片（ママ）島 高見島

さなぎ 牛島 余島（与島）

塩飽二十八島の中に片島という島はない。原文

書の書き違いか、写し違いであろうか



玉島からの塩飽諸島

備中國島々

真鍋島廻二里半 喜界廻三里 白石廻二里半 神（コウ）島廻五里

鷹島廻毫里 玉しま廻一里半

但鷹しまハ応神天皇の古所之黒き外筋石有之由

備後福山御領島々とも

みの島廻毫里半 泉水廻毫里半 走り島廻武里 田島廻四里

横島廻り毫里 百々島廻り二里

一、備前、備中、備後福山御領島々御道法凡之所右之通相聞へ、播州
絵島ハ廻り凡三里余御座候義ニ候得共、十九日より廿三日迄御掛被遊
候ニ付、右島々くわしく御順行ニ候へば、余程日數御懸可被遊と奉存
候 摂州、播州冲合は灘之儀故島杯も無御座、地統と浦辺計ニ御座候
得共、是迄之御様子ニ而は一日ニ毫里之御運び、其上時ニ取御逗留
も有之趣ニ相聞へ申候 備後國よりハ島數も多御座候故、此辺へ御越
之義ハ遙御問合も可有御座と奉存候 いつ頃と申凡之積りも難出来就
は、笠岡、福山へ相頼置玉しま御左右（サウ たより）御移之様子相知
候ハマ申越候答候様、右両所へ相頼置申候

右之通外聞之廉々奉申上候 以上

丑十月

尾道町羊役

文
歲

岩城島が、尾道まで使いを出して収集した赤穂における伊能測量模様をおわ
る。尾道町筆役文藏は尾道までの測量日数を知らうと情報を集めたが、摂津や
播州と違つて、備後からは島数も多くて予想がつかない。笠岡、福山へ御注進
を頼んで引き揚げている。

了

忠敬談話室だより

近況報告から

□『伊能忠敬研究』32号到着、ただちに一気に読みました。今号はとくに興味ぶかかったと思います。漢字ばかりの史料読みこなせるかたがたには毎回脱帽します。(いや、帽子などもつていませんが)「歌」のお話はたのしいですね。本研究会らしい?

【逗子市・秋間実さん】

□『伊能忠敬研究』32号頂きました。号を重ねる毎に密度が濃く、段々大変になつてきました。が、どれも興味深く、殊に忠敬孫忠誨の日記の連載は楽しみです。妙薫が連日外出、毎月13日には源空寺へなど、次号への発展を思われます。「伊能図の経線のズレ」も心に残りました。

【所沢市・井上靖子さん】

□四月十日から、囲碁将棋クラブを開設しました。

【新潟青海町・小野智司さん】

□会報を楽しみにしています。吉田さんの「経線のズレ」は大変参考になりました。二十年ほど前、記念館でズレの展示を見たとき、友人の一人が「これは座標軸のとり方のちがいだれだ」と抗議めいた声を上げたことを思い出します。

【狹山市・小澤健一さん】

□伊能測量第八次丹波地方の在方文書を読み下し中です。なかなか読みきれませんが目下努力中です。全国の在方文書が集れば、など夢をみています。そのような「伊能忠敬研究」集大成ができるべ…。地方の史資料は地方から発信することが大切だとも考えています。

【水戸市・川上清さん】

□我家の古い文書を読みたくて千葉古書会に通つて数年になりますが、進歩がなく、悩んでいる近頃です。

【横芝町・神保誠さん】

□忠敬さんが第九次測量で文化一三年三月二六日(一八一六・四・二三)宿泊した扇町屋を通りながら通勤しています。県下の通つた道をいろいろ地名でおいたいと思って資料を集めはじめましたが、中段

ようになつてしましました。また自分の時間ができるようになつたら再会のつもりです。せめともと思って、目につく資料をあつめていますが、研究誌に出ている皆様のようにはいきません。私一人の勉強というところです。

【狹山市・加藤巷児さん】

□最近「沿海輿地図」の研究をしています。今後とも、この研究を続けたいと思います。

【練馬区・金本勝三郎さん】

バスを会場に開かれます。「大谷亮吉『伊能忠敬』英語版の原稿」高田誠一、「伊能忠敬が使用した基準尺の再実測」大網功両氏の発表があります。

【府中市・首藤郁夫さん】

□昨年五月自宅を改築し、好きな骨董の売買の店を開きました。古い灯かりを中心にやつていいこうと思つております。近いうちにホームページを開く予定です。www.akari-kandy.com (オープンしました)

【杉並区・鈴木皓之さん】

□①四月に上京し、江戸府内図（武揚堂）を入手。②北朝鮮二五万図（韓国製）も入手。③四月の谷川岳に。天神平ロープウェイ終点に行く。④この旅一京都一東京一宮内一富山一西大津の片道切符

【京都城陽市・豊島正さん】

□先日、今度新しく建てられた同窓会館（佐原高）「刀水館」を訪問し、創立当初の「学報」を見せていただきました。まだ大谷著「伊能忠敬」が出版される前に大谷の協力者として研究した文献を当時の生徒へ渡していたのです。忠敬研究の第一歩は母校佐原高校が協力したとは：母校佐原高校のよさを感じています。

【佐原市・成家淑子さん】

□毎号大切に拝読致して居ります。殊に、先号ははからずも、孝おばあ様方のお写真など……昔、佐原で御説明頂きました頃を思い出し居りました。

【下館市・直江泰子さん】

□伊能家、佐原市に寄贈（産経新聞4/23）

江戸後期の地理学者で測量家、伊能忠敬が作つた日本地図「伊能図」の下図約四百点、古文書など約二千八百点などが二十二日、伊能家の八代目当主の伊能淳さんから佐原市に寄贈された。

□各地（九州内）の街道めぐりの道案内などをしています。また、地元の古文書の読み合せなどにも参加していますが、なかなか進歩致しません。

【大野城市・野田茂生さん】

□平凡社の「日本歴史地名大系・北海道の地名」の胆振・日高地区を担当し、すでに脱稿しており、夏頃に発刊予定。この項で「伊能忠敬測量日誌」を引用させて頂きました。礼文華のオムシャ、ワシベツの山越え、勇払の八王子千人同心、様似山道越えなどなどです。

前に富岡八幡宮に行つた時には伊能忠敬像はまだありませんでしたので、はじめての総会でこれを見るのがとても楽しみです。

【苦小牧市・堀江敏夫さん】

□老化が進みささやかな研究のまとめもなかなか進みません。会誌「伊能忠敬研究」をたのしみにしています。アメリカ伊能大図の公表を待つています。

【京都府・松田昭一さん】

□連休明けに佐渡の友人のすすめで「伊能研究」29号5頁の笛井家、31号28頁山本家を訪問し、史料を見学しました。

【盛岡市・渡部健三さん】

下図は北海道北部から九州に至る全国の測量結果を図面におこしたものの。佐原市の伊能忠敬記念館は「忠敬は地図を作ったことは知られているが、製作過程には不明な点が多い。いたいた下図からこの過程がわかつてくる」という。

江戸後期の探検家、間宮林蔵が関与したとされる北海道北部の下図も含まれている。同記念館では「北海道は南部を忠敬、北部を間宮が回ったとされる。間宮の伊能図へのかかわりが具体的にわかるかもしない」と話している。寄贈された下図、古文書などは同記念館で整理したあと、公開される予定。

□全日本歩測大会2003が始まる

今年の歩測大会は全国五つのウォーキング大会にあわせて開催されます。第一回は五月四日武藏野市で開かれ、567名が参加し、51名に達人証が贈呈されました。第二回は六月一日つくば市の国土地理院で開催され、川上さんからのお便りどおり伊能さん、大庭さん、新沢さんが役員としてご協力いただきました。御礼申し上げます。

□「江戸日記」が紙面をかざる！

伊能忠敬の江戸日記、初めて活字に　　日本経済新聞4/28

伊能忠敬「江戸日記」を読む・渡辺一郎　東京新聞　5/19

渡辺代表ご夫妻は、今年は五月七日から六月三日までフランスを訪問され、ペイレご夫妻とも旧交を温められました。

□伊能ウオーカー・番外編、下北半島を歩く

五月二六日むつ市に集合。二七日恐山から歩き始める。初日は薬研温泉まで28キロ。二八日は北通りへ出て下風呂温泉へ。二九日は本州最

北端の大間崎を経て佐井村まで。西通りを三〇日は福浦、三一日は脇野沢へ抜ける。この日と翌日が多少雨具の世話になる。あとは梅雨時期にしては好天だが「やませ」風で気温は程々に恵まれる。六月一日は

大湊まで。この二日間は一日に43キロの行程を乗り切る。二日は岩屋、三日は尻屋崎を経て小田野沢。四日に陸奥湾側に出て横浜町。五日は尾鷲から六日に野辺地へゴール。11日間で350キロはすごい健脚。噂によれば来年は能登半島らしい。会員の中山翠さんはこのあと、青森縄文ウォーカーに参加。棟方志功記念館、三内丸山遺跡回遊の30キロを頑張って歩いていた。

お知らせ

○大阪旅行の参加者が二十名に。考慮中の方もが大勢いらっしゃいました。締め切りを八月八日といたします。参加を決めた方は事務局へ電話、FAX、ハガキ等でご一報下さい。是非多数のご参加を。

○会員の吉井貞俊さんが著書出版。「福の神 えびすさんものがたり」戎光祥（エビスコウショウ）出版「TEL03・3813・5544」

商売繁盛、福德招来、笑門来福

えびすさんに学ぶ幸せの原点！

○渡辺一郎編著「伊能忠敬測量隊」刊行。執筆者・渡辺一郎、佐久間達夫、嘉数次人。

七月下旬小学館より。

○訂正　前号の伊能測量隊行進曲を「鉄道唱歌」としました

が、原曲は「アムール川の流れ」替歌は「旧制一高寮歌」

「歩兵の本領」でした。

○吉田さんの「伊能図における経線のズレ」は筆者都合で休載します。



伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

一予定一

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 発表誌 原則として年四回 64頁 | 第34号締切 8月末 発行 10月 |
| ②例会・見学会の開催 | 第35号締切 11月末 発行 1月 |
| ③忠敬関連イベントの主催または共催 | 第36号締切 2月末 発行 4月 |
| ④その他付帯する事業 | |

三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一万元を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバツクナンバーをすべてお送りします。

送金先 (室番が六一八に変更。乞御注意)

〒162-10822 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八
伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六一〇七二八六一〇

投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四〇六頁です。越える場合は分載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。

一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイ

トルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは三つあります。最新情報は大友常任理事の担当です。それぞれがリンクしています。

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.trim.or.jp/~koko>

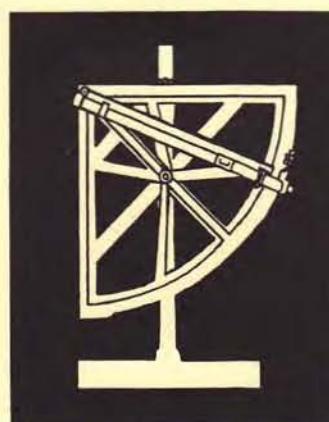
編集後記

番外編は春もみじの下北半島を追っかけ。本州最北端で原発建設中の大間崎では眼前に津軽海峡と北海道がくつきり。青森では三内丸山の縄文遺跡と青森県史と三厩村史に伊能測量記録が残る。◇総会で公開された昔の食事が山口県阿武町史料から。四年前伊能ウオーキングは萩から阿武町へ。到着式で小田徳太郎町長が忠敬さんを讃え、町史を披露。伊能測量が詳しく。◇司馬江漢「西遊日記」を見ていたら、芳名録の北堀江兼葭堂を訪ね、五郎兵衛氏に会っている。今度ご子孫に会えますか。◇日経新聞から・村上水軍の末裔が不明になつた瀬戸内海の地図を探している。来春この後日を訪ねて能島の「村上水軍文化の里交流館」へ行つてみよう。◇上野の国立科学博物館「江戸大博覧会」で寛政一二年製明治三年写の「日本経緯度実測図」に、個人所蔵の子午線儀、象限儀もあつた。◇総会で松葉杖だった前田さんですがステッキになりました。◇皆様からいつも有難く感性を頂戴しています。(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.33 2003



HOT NEWS

- Ei, An intelligent woman -Profile of Ei Ohsaki-
Tadataka Inoh and Kashiwagi Family
INOH'S HISTORICAL SPOT
Monument of Inoh Survey at Kurosaki on Sanriku Coast
FROM VISITORS' RESISTERS

Kojima Kazuhito	1
Kashiwagi Takao	4
Watanabe Kenzo	10
Inoh Yoko	16

TOPICS

- Report on Memorial Ceremony and General Meeting
Trial Team of Land Survey by foot in Heisei Era
Person in Advanced Learn a Lesson to Tadataka
Plain Inoh Take Pleasure in Gorgeous Supper
Welcome to Homepage
Exhibition of Kagetoshi Inoh Collection
Many Injurer of Inoh Map at France

Fukuda Hiroyuki	7
Nagano Tastuyo	12
Murakami kouichi	
Sugawara Ryota	14
Editorial Department	23
Inoh Tadataka Museum	27
Watanabe Ichiro	35
	47

MATERIALS

- Family Documents 24 : Kageyasu and Tadataka
Some Episodes about Tadataka Inoh in Chikuzen
Tadataka and the Tokugawa Government Officials Dispatch to
Inoh Survey on Shimabara area and
The Survey and Map Drawing by Simabara Fief

Ando Yukiko	19
Kawashima Etsuko	24
Horie Toshio	28
Matsuo Takuji	37

REGIONAL MATERIALS

- Inoh Tadanori Diary (2)
Documents of Inoh Survey In Iwaki Island (3)

Sakuma Tatsuo	48
Ito Eiko	56

MEETING ROOM

- Recent Reports from members
Information

Editorial Department	62
	64

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY